

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成 28 年秋号

巻頭言

明日から盆の入りです。去年と同じ酷暑の日々が続いています。テレビはリオのオリンピックの報道でにぎわっています。甲子園の高校野球も同様に日本中をわかしています。

さて今年の夏は七月十三日天皇陛下の「生前退位」のご意向の第一報がNHKの七時のニュースで報じられ日本中に大きな衝撃が走りました。当面この衝撃は収まらないでしょう。

敗戦以来七十一年アメリカの日本占領は厳然と続いています。安倍総理の現実的リーダーシップが日米関係を良好に維持しています。それはつまりアメリカの属国としての優等生ということに他なりません。しかし安倍総理はそろそろ日本を独立させようとしています。その時に新憲法順守の優等生として日本中から敬愛されている今上陛下のご意志の軽妙なご発言はおおげさに言うところと一寸した原爆に匹敵する程のものであります。つまり日本国のあり様を日本国の意志として堂々と発言したということです。しかしこれが真にそうであるかどうかは私のあずかり知らぬことです。さてこうしてわが国は歴然と今年から変わろうとしています。政府は憲法改正の手続きを何れ近い将来とるでしょう。

私は世界は音を立てて一変しようとしていると思います。その真実はつまり我が日本国そのものがその主体であることです。今年の十一月アメリカの国体が一変します。つまり同時に日本国は再生を強制されますが、その実質はすでに今上陛下が自らそのご発言で発動されたのです。

目次

一日偶感	入来院重朝	1
ミャンマー（ビルマ）の赤い大地に立ちて20年		
	宮下 亮善	4
最近の旅行から	江藤ヤエ子	14
モンテッソーリ教育の子どもたち	川涯 利雄	20
参勤交代九州路完歩	澁谷 繁樹	31
日本人の死生観	十五代沈壽官	34
飢肥 ～ 小倉処平 ― 歴史を訪ねる旅（6）		
	下土橋 渡	36
京都浄福寺 ― 歴史を訪ねる旅（7）		
	下土橋 渡	44
時の過ぎゆくままに（6）		
生はいとしき蜃気楼		
	桐野 三郎	53
入来町麓と八重から世界大乱の時代を考える		
	中西 喜彦	81
編集後記		
	中西・下土橋・澁谷	92

表紙：平成27年の台風15号（8月25日）で倒壊した後、平成28年4月に新しく復元された庶流入来院家のかやぶき門。立っているのは団体観光客を待つ観光ボランティアの小学生。平成28年5月13日撮影。

一日偶感

入来院重朝



今日は月曜日です。一週間たつのは実に早いと思います。というのは、私は血糖値が少々高めで、かかりつけのお医者さんからすすめられたN医療食品(株)から「食宅便」が送ってくる日なのです。つまり一週間分まとめて、冷凍弁当7ヶを明細と共に月曜日午前中に送ってくるのです。一人住いの私は毎夕この弁当をチンして食するのです。大体カロリー度は200〜300キロカロリーで、例えば今夕食するつもりの弁当は「豚肉の黒胡椒炒め」で熱量256キロカロリーです。おいしいかと言えば、まずNO!です。

しかしチンして食べられるという簡便さは

何ものにも代えられません。というわけで、今朝「食宅便」が届き、ああ一週間たったのかと思ったわけです。つまり一年たつのもあつと言う間という感じです。その間印象が鮮烈なのは我がトッチャンボーヤのアメリカ上・下両院での春先の演説です。この演説で彼はボーヤを卒業しました。そして今や日本の安倍総理は世界のリーダーになりました。

先般の伊勢志摩サミットでの彼の采配振りはずまずの出来だっただろうと思います。それからの消費税延期の彼の発言について世間は特に野党の連中はさんざんくせをつけていました。トッチャン安倍総理はいちいち相手にせず涼しい顔をしていました。つまり晴れて総理は第一人者になったというわけです。

さて世界は今や大げさではなく、音を立ててさま変ろうとしています。去年からの「分

裂」さわざは欧米では日常になりました。今や支那が分裂するかどうかが今後の話題になるでしょう。すなわち世界の大動乱は支那次第です。

ところで我が日本国はどうか、世間の表層はテンデバラバラで、特に野党連合の人達の間で言っていることは戦後の日教組の教育の成果をみる思いです。マサに新制中学二年生程度の学級委員会での演説さながらです。

今年の夏参議院の選挙が終ると一応落着くのでしょうか。

さて目下我が国の耳目を集めている話題と言えば舛添都知事の去就の問題です。これを書いている現在六月十三日は総務委員会での集中審議が山場だと報道されています。

私は、彼は世間知らずの頭でつかちのバカボーヤだと思っていましたから、おそらく彼は眼光するどく追求はバッサバッサと撫斬る

でしょう。結局不信任決議案上程でケリがつくのでしょうか。では一体誰が次の知事になるのかこれが次の話題です。我が国は大体落着くところに落着くのが流儀ですから心配しません。世界はそうはいきません。例えば、イギリスの去就は如何。アメリカのトランプ旋風のイミするところ如何。これらは世界的スケールで影響が拡大するでしょう。

70年前敗戦国日本をGHQは永久占領のあかしとして現憲法を發布しました。建国たった200年余の植民国家の国民性は時に野卑であり時に純情であり己の力をもてあます、オッチョコチョイでもあります。何でも手に入れたと思った彼等にしてみれば日本の永久占領も本気でためしてみたくなつたのも仕様がありません。しかし世界は彼等の思い通りにならないことがすぐわかります。

とどのつまり現オバマ大統領は今や世界

から相手にしてもらっていません。現アメリカ政権は出来るだけ軍事力は使わない主義です。すから日本の永久占領はやめるはずで。恐らく数年かけて日本から米軍は撤退するでしょう。アメリカもオールマイティではないことを彼等はよく自覚しています。つまりオカネがないのです。そこでランプが実際大統領になったら、恐らく現実になりそうですが、日本も普通の国になれと言ってくるでしょう。つまり、自分のことは自分で始末しろと言うことです。至極当たり前のことですが、現在の日本の大半それも自分はエライエスタブリッシュと思ひ込んでいるオメデタイ連中勿論安倍トツチャン総理は除きますが、彼等はアメリカにずっと占領していてももらいたいと本気で思っているのです。

さて世界の現実は弱肉強食です。核の廃絶は夢のまた夢です。人類は、一度手に入れた

「火」は絶対に手放すことはありません。これから我が日本はどうなるでしょう。私はちゃんと現実的に生きのびると思います。つまり日本は一夜で変わる国ですから。世界は日本を日本人以上によく知っています。これは本当はオソロシイことです。

(炬ばたセイ談庵主)



ミャンマー（ビルマ）の 赤い大地に立ちて20年

宮下 亮善



ミャンマーは、南シヤン州の山岳民族の住む地域で、教育支援活動をして、20年の歳月をむかえる。現在、ミャンマーは、このところの民主化で、最後のフロンティアとして、多くの日本企業が草木もなびくが如く、資本投下を急いでいる。20年前の年間所得は2万円から3万円、それが今では、10万円を越し、勢い物価は高騰し、ヤンゴン市内の事務所の家賃が東京より高いという状態である。山岳地帯の土地も華僑に買い占められ、あんな荒れ地がどれ程のものかと思われるが、将

来の値上がりを見越して、土地転がしが行われている。市場経済はつまるところ、弱肉強食の原理、都市と地方との経済格差を生み、貧富の差を助長し、農村から都市部へ仕事を求めて、人口移動が活発化するであろう。都市への一極集中、地方農村の過疎化が顕著となるものと考えられる。

永年の軍事独裁体制の矛盾をどのように解消するのか、新政権の前途は非常に険しいものがあります。ミャンマーは誰が政権を担おうが、憲法改正、少数民族との和解と、宗教問題が大きいのかかっています。民主化で言論の自由や表現の自由が保障されたことは、非常に素晴らしいことではありますが、スーチーさん率いる新政権の舵取りの失政がないとの保証はありません。昨年、現地にまいりましたが、新政権は日本の民主党のようなものではないかと危惧されているといい

ます。

『和尚さん、ご苦労さまです。私はインパール戦線の生き残りです。タチレイクの捕虜収容所に居ましたが、インド兵のパトロールが居なくなると、毎日、ビルマ人が、日本の兵隊さん、このおにぎりを食べてくださいと柵越しに『おにぎり』を差し入れてくれた。

私は、この『おにぎり』で、命をつなぎ無事に日本へ帰って来ました。』と。また、ヤングンのレストランで紹介されたミャンマー人老記者は、『和尚さん、日本兵はビルマに戦争に來たのではない、イギリスと戦うために來てくれた。日本人よ、しっかりしてくれ、我々は日本人に感謝している。』また、マンダレーヒルの日本人慰霊塔の掃除をしているミャンマー人は、『日本の兵隊さんのお蔭で、ビルマは独立できた。だからこうして、掃除をしている。日本の兵隊さんに感謝している。』

日本では考えもしないことを、ミャンマーの人々から聞かされ、同じ日本人として恥ずかしい思いと申し訳ない思いで涙腺が緩むおもいであつた。戦争は憎むべきことではあるが、そのために亡くなつた英霊を侮辱してはならない。今だ帰らぬ遺骨が何万と、その望郷の念を抱いて眠っております。このことを機縁に、南シャン州カックパタゴの北の岡に、ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊のための『ラインクン地涌パタゴ』を建立しました。高さ15メートル、その建立資金は700万円であつた。

ミャンマーの山岳民族の子供たちのために、教育支援をするのは、ミャンマーの子供たちが貧しいから支援しているのではない。私たち日本人が豊かな生活を享受するなか、一方では、貧困を助長しているという現実があります。ミャンマーの子供たちは僻んでもいま



ラインクン地涌パコダ
ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊の為
2004年12月建立・高さ15メートル



ラインクン地涌パコダにて、ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊法要の様子。2004年11月24日。“遙かなるビルマ同胞よ安らかなれ”

せん。妬みもしません。笑顔がかわいいです。

目の玉がキラキラしています。『貧しいことは、恥ずかしいことでは無い、本当に貧しいことは、貧しいことを恥ずかしがることである』と、ミャンマーの子供たちから学びました。

そして、今だ、彼の赤い大地に眠る日本人将兵の誇りを失わないために、彼らに替わり教育支援を行っている。年間の学費が10000円足らずの奨学金の申請書に、子供の顔写真の添付を求め奨学生の募集を行いました。

ところが、ある村の家族からは、申請書が届けられなかった。私たちが、その村の親に会い理由を尋ねたら、「学校に出したいけれど、申請書に貼る写真代がない」との返事でした。その写真代、わずかに『4円』。日本の社会では考えられない話です。豊かな国の発想とその愚かさを思い知らされ、申し訳ないことをしたと反省しきりでしたが、このこと以来、

写真の添付は廃止しました。また、日本人カメラマンが、マニラのスモークンマウンテン

で、空き缶や空き瓶を集めている10歳の女の子に「あなたの将来の夢は何ですか」と尋ねたら、その女の子は「私の将来の夢は『大人になるまで生きる』ことだ」と、これが夢ですか。ショッキングな話です。大人になるまでが、困難なことであることを意味している。ミャンマーの少数民族の村では、竹と茅で出来た教室で勉強しています。この20年間で59校の小学校、中学校、保育園、寮を建設支援して来ました。雨風から守られた安全な校舎で子供たちが勉強をし、村づくりや国づくりに励んで欲しいと思っています。ミャンマーは貧しいために、政府が山岳地域の村に学校を作ってくれる財政基盤がありません。山村に行くほど教育施設は整っていませんが、日々の生活に追われながらも、子

供たちに教育の機会を与えたいと思う親はとも多いのです。

私たちの支援は、全面的な支援はしません。「自助努力なきものに支援なし」として、村人たちに『自立』を求めており、建設資材のみを支援し、村人たちの労力奉仕を条件としています。

また、1999年からシャン州インレー湖のほとりにあるニャンシュエ郡教育事務所管轄下の中学校、高校の子供たちを対象に奨学金貸与の支援事業も行っています。経済的理由で進学できない子供たちを各学校から推薦してもらい、現地協力者が面接の上受益者を選抜し、中学生に年間800円、高校生に1200円の奨学金を卒業まで、毎年貸与しています。もちろん、卒業後は働きながら、奨学金に返済することを条件としています。

私たちの奨学金制度は、3つの特筆する活

動を現地にもたらした。

〔その1〕現地の先生方を動かし、郡教育委員会管理下の小中高の先生たちが、毎月の給与から、奨学金基金を作って貸与を始めた。

〔その2〕医者、事業主など、民間ボランティアも出資して、奨学金基金作り活動を始めた。

〔その3〕2006年から、奨学金の返還が始まりました。

途上国では、貰い放しがほとんどですが、非常に稀有なことです。『自立』の心が根付いている証しかと思っております。途上国では、貰うのが当たり前の世界です。

ちなみに、奨学金受給者は2016年現在、1700人を超え、内、200人が大学を卒業している。国際弁護士、医師、小中高の教師、エンジニア、公務員、助産師、軍人など、彼の国の有為の人材として、活躍しています。

もとより、海外における支援活動の目的は、

彼の国の国づくりに資することであり、国づくりは人づくりでなければなりません。なかなか、教育支援は『建国の基礎』であればまさに『自立』を促すことでなければ、真の支援とはいえません。そして、さらにいえば、そのことを意識する、意識しないにかかわらず、日本にとつての国益に資することでもあるのです。なぜなら、日本人の支援に感謝こそすれ、悪口は言わないでしょう。結局のところ、国際関係も互いの国の信頼関係で成り立っているからである。私たちの活動も微々たるものではありませんが、この20年の間、延べ人数およそ50000人もの子供たちが、各学校で学び巣立っています。

物事には陰と陽、笑う人あれば泣く人あり、怒る人あれば喜ぶ人あり、豊かな人あれば貧しい人があるように、地域と地域、国と国と

の関係においても、様々な明暗が存在します。物質文明を何不自由なく謳歌する人々もあれば、その貧困のために子供を人身売買する人々もいます。

世界中には、8億を超える人々が飢餓に苦しみ、栄養不足に悩む子供たちが1年間に600万人存在し、世界人口の2割の先進国の人々が8割の消費を占め、安全な飲み水さえ飲めない人々が17億人も存在する。

私たち日本人が世界中から輸入する1年間の食料はおよそ5400万トン、そのうち650万トンは『残飯』として廃棄されている。日本人の食生活はもはや輸入なしでは成り立たない状態である。

世界中から食料や資源を輸入し、消費し、豊かな生活を享受するなか、途上国においては飢餓に苦しむこの矛盾を私たち日本人はどのように考えたらいいいのでしょうか。

『世界中の消費の大部分は圧倒的に豊かな人々に集中しているが、その消費がもたらす環境破壊は貧しい人々に最も深刻な影響を及ぼしている。貧困と環境破壊はしばしば相乗的に悪循環をもたらす。過去における資源の劣化が今日貧困を深刻化させているが、今度はその貧困が原因となって農業資源基盤の維持、回復が困難となり、森林伐採に代わり、砂漠化を進め、土壌の侵食を促進し、地力の回復を遅らせる悪循環を引き起こしている。』(UNDP国連開発計画(消費パターンと人間開発) 抜粋)

このような指摘は、ミャンマーの南シャン州インレー湖周辺でも顕著にあらわれている。燃料木の森林伐採による土壌劣化が進み、山地一帯が侵食谷(ガリーズ)を形成している。植栽不能な赤茶けた大地がむき出しになっている。

世界の人口は、2050年には90億人、うち80億人が途上国に集中する。この規模の人口に対して十分な食料を供給するには、現在消費されている基本カロリーの3倍、穀物に換算して、年間100億トンの食料が必要となる。ちなみに、この地球の人口許容能力は60億人といわれている。現在の人口は65億人である。

ニャンシュエ第1中学校の女の子の家は、3年前母が亡くなり、父と2年生の妹の3人家族ですが、その小さな家には3つの家族10人が同居しており、台所ともう一つの部屋には雨が降っていました。第2中学校の女の子のお母さんは奨学金が貰えることになり、教育がづけられると大泣きして喜んだ。ニャンシュエ高校の男の子の家は、3年前に両親が離婚し、母と3人の子供で暮らしており、6年生の子は二人の弟妹の面倒を見なが

ら、働く母を助けその時より毎日3度の食事を作っている。雨の中家庭訪問をしている中、雨漏りではなく2軒の家では家の中に雨が降っていた。レモングエには5つの村があり、パンティン・タイエーピンの村は、現在の学校から2マイルほど離れている。小学生の足で1時間ほどかかるためほとんど学校に行けずにいる。他の村においても村の生活環境の厳しさから、先生の給料不足から先生が山に登ってこず、現在ある小学校も学校が開けない問題を抱えている。イエベ小学校のほとんどの子供は、裸足で通っている。1年生のある子供は、自分の弟を負ぶって勉強をしていた。

キョン村は、人口2700人、戸数508戸、7つの村で構成されている。飲料水はすべて天水でまかなっており、雨季の間に溜めた水で十分賄えるとのことであった。村の中



ニュヤンシュエ教育事務所で奨学生に挨拶する宮下代表（2015年11月20日）



ニュヤンシュエ教育事務所庭にて奨学生等との記念撮影(2015年11月20日)

で車をもっているのは、10名程度である。レモングエ村は、人口2000人、戸数450戸、8つの村で構成されている。村の中に小学校が3校、寺が3つ、村の一番の問題が水である。2月から7月の半年間は、毎日2時間半かけて、山の下の方まで汲みに行く。このような状態なので、教育に対する村人の関心は薄く、一番大きい学校の小学生はわずか2名である。その他に、山の人たちはヨウド分が不足するために、甲状腺肥大の問題も抱えている。

以上が、現地の現状であるが、貧困がいかに村人の生活に影響を与えているかがわかります。現在の日本では想像もつかない途上国の実情です。ミャンマーが民主化されたとはいえ、都市部のインフラ整備からであれば、山岳地帯への環境整備は相当の時間を要するかも知れません。

いずれにしても、教育は建国の基礎であれば、その人材教育は彼の国にとって重要な問題である。

昨年訪れたニャンシエ教育事務所での奨学生との面談で、『私たちはミャンマーの国の宝になる』と所信を述べていました。まさに、私たちが期待する人材の育成が根を張り、枝を伸ばし始めたことを確信した訪問であった。彼らが、ミャンマーという国の有為の人材として活躍し、もって日本とミャンマーの善隣友好の懸け橋となってくれるならば、これに過ぎる喜びはありません。

終わりに、ミャンマーの人々は、『鎌倉の大仏』が大好きです。どうして鎌倉の大仏を拝むのかとききましたら、『鎌倉の大仏を拝むと日本に行ける』という憧れがあるのだと聞かされました。『親日国ミャンマーに幸あれ』

(天台宗大雄山 南泉院住職)

最近の旅行から



江藤 ヤエ子

一、佐渡の旅

五月二十四日、旅の友・森佐和子様と阪急のツアーに参加して佐渡に行った。私は十六年ぶりである。その時は秋で、島では柿の実が赤く色づいていて、バスガイドが「これから、皮を剥いて干し柿作りです」と、説明していた。今回は初夏なので柿の実も余り分らなかった。

新潟港から、高速船ジェットfoilで島に向かうと約一時間で両津港に着いた。そこからバスで相川に移動、加茂湖温泉吉田屋に

泊まる。海の見える室で寛いだ。一行、二十九名の中で八名だけがこの宿だった。

二十五日、七時から朝食を済ませ、九時発で尖閣湾揚島遊園に行く。北欧のような景色だった。それから、佐渡金山に入る。江戸幕府の財政を支えた栄光の史跡である。前に見たよりも見学コースの人形が増えていた。江戸時代には、罪人がここに送られて来て、働いたのだと思うことだった。

次に小木港に行き、たらい舟に乗った。たらいを自分で漕ぐという女性がオールを船頭さんから受け取っていたが、舟はぐるぐる廻るだけで進まなかった。私達が乗った舟の船頭さんが、「一ヶ月は訓練しないと船頭にはなれません」と話した。

舟から降りて、佐渡歴史伝説館に行く。八百年前の佐渡を再現してあった。私は、前の時には、好きになった男性にたらい舟で会い

に行つたのだと聞いたようだったが、資料によると、命を助けてもらった猫が人間に化けて飲み屋で踊りを踊り、金を稼いで恩返しをしたとあつた。猫も化け猫の話が多いので、良い話だなと思つた。

昼食は「夕鶴」で郷土料理の豪快な沖汁を食べた。日本庭園も美景で見学もした。

尾畑酒造に行き、「真野鶴」の蔵元を見学した。それからトキの森公園に行き、トキを眺めた。前に来た時には、中国から来たトキを飼ひ始めた頃で、番^がから増やすことに力を入れていたが、今では家族が増えて管理員も安心の様子だった。

その夜は佐渡加茂湖のホテル万長に泊まる。ここも、室の窓からは海が見えて、散歩している人も見えた。ホテルの裏が海岸なのだが、散歩に行く元気はなくて部屋で寛いでいた。

その日は、私の誕生日だった。海外旅行な

ら、添乗員がツアー客にケーキをおごり、全員で祝ってもらえるのだが、日本では、自分で祝うしかないのだった。

夕食後、ロビーで民謡踊りがあるとのこと。で早めに見に行き、椅子に座っていた。仲居さんが五名で五曲の踊りをされた。前に来た時には、バスの運転手も美声で歌を披露していたから、音痴の運転手は務まらないと思つたのだった。

二十六日、ホテル発、八時四十分で、先ず、大野亀に行き、日本では山形と佐渡にしか生息しないというトビシマカンゾウを見学し、日本三大巨岩の一つである一枚岩を見た。その後、佐渡の味いちばで、海鮮丼の昼食。両津港からカーフェリーで新潟港へ。約二時間半かかったので、私は座敷に足を伸ばして寝ていた。バスで約一時間半、村上市の瀬波温泉の汐見に泊まる。



佐渡の尖閣湾揚島遊園にて。2016年5月25日



弥彦山（新潟県西蒲原郡弥彦村）にて。2016年5月27日

二十七日、ホテル発七時四十分で、弥彦神社に行く。ロープウェイで登り、越後平野を一望した。少し曇っていたので遠くまでは見えなかったが、ホテルを出る時には雨が降っていたから、やんだだけでも嬉しかった。

寺泊に移動して、魚のアメ横と呼ばれる市場通りを散策した。それから中央水産で昼食。高級魚ノドグロを食べた。綺麗に身をほぐしている人がいて、私の食べ方は汚いなと思うことだった。

洋食器のキタローに寄る。全国的にも有名な燕市にある店だ。私は記念にスプーンを求めた。新婚さんでもいたら、プレゼントすれば喜ばれるだろうが、一人暮らしの身では差し上げる人もいない。

JR燕三条駅から東京駅に戻る。浜松町駅に移動して羽田空港へ。ここで解散した。それぞれの便なので、すぐに便がある人もいた

が、私たちは約二時間待ちだった。夕食の弁当を求めて、半分食べ、残りは機内で食べた。お茶がもらえるから助かった。鹿児島空港二十時四十分着。森さんと別れる。彼女は自分の車で十五分くらいで自宅に戻るのだから羨ましい。私は鹿児島行きのバスで中央駅まで行き、それから指宿線に乗り指宿駅で下車。タクシーで帰宅したのは、翌日の零時過ぎだった。

森さんとは、秋に外国に行こうねと約束した。私のパスポートが、来年の二月には無効になるからだ。もう更新しないことに決めたからである。

老齢になり、数日の旅でも疲れるようになった。歳には勝てない。



二、日帰りツアー

六月十一日、読売旅行のツアーに参加した。鹿児島中央駅・西口（切子塔前）に七時三十分集合で三十九名の参加だった。

高速道をバスで進み、植木IC経由で水辺プラザに十一時到着。少し早めだが旬の素材を使った昼食を食べた。バイキングだったので、人の取る物を私も摂った。私は歩いて食べ物を取るのには余り好きではない。会席料理なら良いのと思ってしまふ。食後、隣の物産館で買い物をした。

玉名の高瀬裏川に行き、河畔を彩る約六万六千本の肥後しょうぶを鑑賞した。紫の花が咲きそろい目を楽しませてくれた。

桃園に移動して、一玉は自分で取ったが、六個入りのお土産をもらった。数日、自然に置いておくと、匂いが出るそうで、それを冷

やして食べると美味しいそうである。

フードパル熊本ワイン工場の見学をして試飲をした。私は甘口を少し飲んだ。植木産の果物と野菜を使ったジュースも飲んだ。バスの座席も一人で二席を使うことができたので、もらった箱を横に置いておくことが出来て助かった。もらった箱を入れるつもりで持ってきていた袋には入りきらず、箱を抱えて帰ることになった。「熊本産の桃」と書いてあるので、遊びに行ったことがばれるのだった。鹿児島中央駅に十九時頃に着いたので、指宿線が出るのを三十分も待っていた。

三、長島・水俣の旅

六月十二日、ツアーに参加した。三食つきだったので、先ず「サンドイッチとジュース」が配られた、相席の方は溝辺から乗って来ら

れた。十時三十分、黒之瀬戸大橋のだんだん市場に着いた。ここで「じゃが串と赤巻」をもらった。

久しぶりの長島である。針尾公園に行く。生憎の曇りで、展望は良くなかったが近くの諸浦島への橋が見えた。私が住んでいた頃には無くて、舟で渡っていたのだった。

長島大陸市場食堂・鰯王で「ブリづくしの昼食」だった。刺身から煮物など鰯だらけで骨をとったりしながら食べた。刺身の量も多く、食べごたえがした。

昼食後、「島美人・焼酎工場」に行く。長島には五箇所の蔵元があるそうで、芋焼酎のつくり方をスライドで説明された。ミニボトルのプレゼントもあった。

蔵之元港では、希望者はグラスボートに乗って、長島海中公園を見学されたが、私は、外国で見ていたので、参加せず海を眺めてい

た。島みかんアイスをもらったが、私は冷たい物は駄目なので隣席の方にあげた。

道の駅みなまたに行く。ここではサラダ玉葱一キロと甘夏ゼリー、あおさ海苔、メロンをもらった。土産で袋も大きくなり重くなった。

鹿児島空港近くの「ざぼんラーメン」で夕食を食べた。私は久しぶりのラーメンだった。鹿児島に住んでいた頃は、姉宅の近くに店があったので、寄っては食べていたのだった。

空港で相席の方が降りられたので、私は靴を脱いで、足を伸ばしていた。余り、歩く所は無かったのに、疲れていた。もう歳には勝てない。

二十時過ぎ、鹿児島中央駅に着いた。重い荷物を背中に背負い、駅の階段を登る。

帰宅したのは十時半過ぎだった。

(エッセイスト)

モンテッソーリ教育の

子どもたち



川涯 利雄

老人ホームを去る

七十五歳になったら老人ホームの園長を辞めようと決めていた。施設の建て替え・後継者の育成も終わった。職員配置も整った。職員の笑顔が穏やかでうつくしいことがなにより園の誇りである。

地域の協力をいただいて、防災訓練を実施した。災害時に助けを求めて施設に走りこむ人々があつたら、それも受け入れなくてはならない。そのための毛布・食料も確保した。

特に、老人ホームには、ベトナム（本部はフランス）から来てもらったシスター方が四人（二人は鹿児島で日本語勉強中）いる。そ

の祈りや笑顔が、人間大事の和らいだ空気を醸し出し、園全体にやさしい空気を広げている。シスターに爪を切ってもらい、耳の掃除をしてもらう利用者の陶然とした笑顔に会うのが喜びだった。私は高齢のご婦人たちから熱いハグを何度もいただいた。私の任務はこれで終わったと思った。

幼稚園園長受諾

今年三月初旬、九年前、私を老人ホームに任命してくださった司教様に、後進に道を譲りたいと辞職を申し出た。感謝の言葉をいただいたあと、今度は、幼稚園の園長として、もう一仕事していただきたいと依頼を受けた。思いもしない人生がまた新たに展開することになった。考える時間をいただきたいと申し出たが、カトリックの信者が司教様の依頼を断るわけにはいかない。数日後、受諾の手紙

を出した。

三月二十九日、老人ホームの職員から心づくしの送別会をいていただく。こんな光栄な送別会は初めてだった。翌三十日引越し。そのまた翌日の三十一日、ザビエル教会で幼稚園職員の辞令交付式に参加した。

四月一日、私は鹿児島市のカトリック系幼稚園の入学式に出席。創立以来四十五年、七代にわたって神父様が園長を務めた幼稚園に、俗人の私が赴任し、「新しい園長先生」という立場で、幼児八十人とご父兄の居並ぶ入学式に臨んだ。

驚異の子どもたち

三歳・四歳・五歳の幼児八十人の入学式である。泣いたり、わめいたり、さぞにぎやかなことだろう。そういう子どもたちに、どういう言葉で、どういう挨拶をすればいいのか、

私は直前まで、心が決まらなかった。会場は隣接するカトリック教会のお御堂である。

「入場！」の言葉につづいて子どもたちがお御堂に入ってきた。両手を合わせてイエス様の像に丁寧に一礼して幼い子どもたちは入ってくる。自分の位置に着席した子供たちは静かで、よそ見をするものはいない。「起立」、「お祈りのことば」、「聖歌」と続く。幼い子どもたちは長い「主の祈り」を朗々と唱え、まっすぐ顔を挙げて聖歌を歌う。歌詞を間違う子など全くいない。明るい声がお御堂に満ち、どの子どもの顔も引き締まったいい顔だ。

新園長の講話を聴くとき、ああ、この人が新しい園長先生なのかと興味深そうな、親しそうな目が私を見つめた。しかし、態度は乱れず、目はやさしいほほえみを湛えている。清楚に姿勢を正して話を聞いてくれた。

これはなんということか。かねてみる幼な

子の甘えや喧騒はここにはない。子供たちは生活習慣としてのマナーを身に着けた一人の人格なのだと思った。私は七十五歳にして、また、新たな出会いをいただいた。これがモンテッソーリ教育を受けた子供たちの姿である。

三歳の新生児もいるではないか?! 彼らはどうして祈りや聖歌を記憶したのか? どこでマナーを身につけたのか? という疑問があった。

わが幼稚園では(他の幼稚園もやっているのだが)、一歳児から、月に一度、母親と一緒に幼稚園に来てもらって、基礎的な保育指導をしている。職員のみごとな指導力の成果というほかはない。

モンテッソーリ教育

モンテッソーリ(1870~1952)はイタリアの女医である。女性で初めて医科大学に学び、またローマ大学で実験心理学・教育学を学んだ。はじめ貧民窟の精薄児の教育を任されたが、独自に開発した教具を用いた教育法で驚異的な成功をおさめた。さらに、その方法を一般の幼児教育に用いて圧倒的な成果を上げ、モンテッソーリ教育法は世界に広がったのである。イタリアのムッソリー政権の弾圧から脱出するなど、苦労も多かったが、彼女の開発した幼児教育法は世界中から迎えられた。オバマ大統領夫妻、クリントン元大統領夫妻、コンピューターのマイクロソフト社を設立したビル・ゲイツなど、この教育法で育った世界の大物は枚挙に遑がない。普通の教育と何が違うのか? 子どもが「自律心」を身に着け、4歳、5歳で責任を知り、

社会道徳を身に着け、一個の人格として「自立」するのである。

押し付けられたものではなく、自分の自由選択に中で、自然に身に着ける、ここが尊い。

(1) 敏感期

モンテッソーリは、子どもたちには自然（神）が与えた成長の宿題があることを知った。少年少女期に思春期という時期があるように、0歳から3歳、3歳から6歳の子どもたちにはそれぞれ、〈本来の自己になるため〉の厳しい宿題が生命のなかに組み込まれていることを女史は発見し、3歳から6歳の期間を「敏感期」と名付け、人間成長のもっとも大事な時期として位置づけた。幼子たちはこの期間に物に触れ、疑問を抱き、確認するために、何でも自分でやろうとする。「僕がする」「私がする」と言つてきかない時期である。

自分で選び、自分で取り組み、自分で理解し、納得し、自己の人格を開いていくためには、子どもたちにふさわしい「環境」が必要である。モンテッソーリ教育には「環境」が不可欠である。環境の一つは父母であり、教師だが、工夫された「教具」が特に大事である。

モンテッソーリは子どもたちのために、千以上の教具を作った。その中から、今この子どもたちに必要な教具を選び、教室にきちんと設置して置く必要がある。

工夫された教具に出あった子どもたちは次のように反応する。

1 自主的に教具を選び、教具が要求する「お仕事」に取り組む。（この時、大人は介入しない。）

2 子どもは没頭し、おなじ「お仕事」を繰り返す。周りの音響にも気づかないほど

の集中力を示す。30人近い子どもいる教室は静まっている。

3 これでわかった。これでこの「お仕事」

は終わりだと子どもは宣言する。

「先生！僕これ、できたよ」と報告して、次の段階に進む。

教室に、子どもを叱責する声などない。

(2) 「お仕事」

わたしは「お仕事」と言った。そう、この取り組みは子どもの「お仕事」なのである。

モンテッソーリ教育で最も大事な言葉の一つである。子どもたちは「本来あるべき自分に成長するために」真剣にその教具の求めるものに取り組む。その時間をモンテッソーリは「遊び」・「作業」などと安易に呼ばない。本来の自己の命を確立するために、真剣に取り組む子どもたちに敬意を籠めて「お仕事」

と呼ぶのである。

(3) 集中・成就感の成果

一人で「お仕事」をする子どももの集中力はすさまじい。周りに人がいても気がつかず、その近くで音楽が響いても気づかないほどだ。この集中力の中で、彼らは社会生活のルール、数の概念、言葉と文字の存在、文化（歴史・地理など）など、人間が身に着けるべき基礎知識に気づき、発見を重ねる。本が読め、九九が言える子どもも少なくない。

その「お仕事」に取り組んだ成就感・充実感を子どもたちは毎日、自分の内に積み重ねる。そのなかで、自然に誇りが育ち、他者への思いやりや愛が芽生え、結果として、社会的マナーを身に着けた「自立」した幼い紳士・淑女が出来上がってゆく。

モンテッソーリ教育法は人間の生理的自然

の理にかなった教育法なのである。

(4) 縦割り制度

もう一つ大事なことがある。モンテッソーリ教育は薩摩の郷中（ごじゅう）教育と同じ縦割り制度を採る。

各クラスには、3歳、4歳、5歳児がいて、年齢の違う者同士へアを組む。年長組の子どもが年中・年少の子どもの指導をする。年長者は幼い者を労わり、その中で小さき者・弱い者へのやさしい心を身に着ける。この過程で、自分の内に自信や誇り、社会的マナーを身に付け、自律心が育ち、自立心を獲得する。年少の者はやさしい先輩にあこがれ、先輩の真似をしながら著しい成長を遂げる。

私が赴任して一学期が過ぎ、二学期が始まった。この間、子どもたちが争う姿を一度も

見ない。年長の子が年下の子を指導する姿を何度か見たが、子どもを叱る先生の声を一度も聞かない。叱声や大声などよき教育の場には不要なのである。子どもというものを科学的に十分研究し、人間を熟知したうえで出来上がった教育法は本物である。

わが敏感期

私は昭和十五年十月生まれだから、太平洋戦争が終わる昭和二十年八月には、まだ、四歳と十か月だった。もう七十一年昔のことだが、わたしにも、たしかに「敏感期」があった。

私の四、五歳のころの国は極貧状態で、人たちは「食」を確保するのに懸命で、子どもたちに構っていられなかった。子どもたちは放任され、自由だった。

貧しい生活の中で苦勞して働く親を知って

いたから、子どもたちは親孝行ということをも十分知っていた。親に迷惑を掛けないよう、自分で選び、自分で作り、自分で怪我し、蓬を揉んで自分で治療し、自分という人格を作り上げていた。すべて自然に学んでいたのだった。

思えば、モンテッソーリの教具はなかったが、自然に学びながら、モンテッソーリ教育によく似た状態で我々は育ったのである。

わが父は満州から病んで帰り、三人の子を母に残して結核で逝った。大きな地主の娘だった母は、実家に身を寄せていたが、自立のために教職に復帰し、長女一人連れて任地に赴いた。私と一つ年上の姉は、そのまま祖母の家に預けられた。間もなく祖父が逝き、叔父が戦死し、大きな家は祖母と小母（叔父の嫁）、その娘二歳、そして私の姉五歳。男は四

歳の私だけだった。年季奉公の若者が常に何人かいたが、祖母と小母がうまく協力して家を守っていた。私の日課は風呂を磨き、水を溜めることだった。風呂焚きは祖母の役割だった。

「利雄ちゃん、風呂の水、汲んでね」と小母に言われると、私は「オツケー。パラション！」と答えて、井戸に走った。深い井戸の水面に着いた釣瓶つるべがゴボリと沈み、ずしりと重くなる。それを滑車で引き上げる。手繰り寄せた綱は、右手を大きく回して輪を描き、きれいな輪が井戸の縁に重なって高くなる。輪の大きさがほぼ同じであることが誇らしかった。

汲み上げた水を桶に移して風呂に運ぶ。その距離が意外に長く、途中、階段が二段ある。水桶そのものも重いから釣瓶2杯の水はまだ運べない。一杯ずつではいかにも面倒だ。

四歳の子どもは考えた。桶に穴を開けよう。孟宗竹の節を鉄棒で突き落として、桶に差し、風呂に直接水を流す。直線距離は手で運ぶ距離の半分もない。これはいいぞ！

私は、夢中になって作業に取り組んだ。まず、風呂場と井戸の直線距離を縄で測った。裏の竹山に入り、鋸で細身の孟宗を切り、鉋の裏を使って枝を落とし、鋸を使って、根元の太い部分、先の細い部分を切り落とした。日頃、大人たちのすることをしつかり見て身に着けていたのだ。

鉄棒を持ち出して、竹の節を突き落とした。だが、桶に穴を開ける段になって、ノミがうまく使えない。桶を壊さずに穴を開ける作業は僕には無理だと思った。年季奉公の兄ちゃんのおかげで、特にやさしく賢そうな兄ちゃんに頼んで、桶に穴を開けてもらうことに成功した。兄ちゃんは孟宗竹の先をすこし削って

細くし、そこを布で巻いて穴にぴたりと差し込んだ。「いいね。できた！」と兄ちゃんも喜んだ。利雄式水汲み装置はこうして完成した。「利雄ちゃん！お風呂の水頼みますす！」「オッケー。パラシヨ」。快活な声で私は応えたものだ。（この言葉の意味を知っている人はお教え下さい。満州にいた母から教わったのだと思います。ロシア語か？）

モンテッソーリ教育を受けた現代の聡明な子どもたちはどんな工夫を凝らすだろうか？。

世界の危機・日本の危機

世界は今や、すさまじい様相を呈している。これまで見なかった陰惨な戦争やジハードが勃発し、世界中に火の手が上がっている。

世界中の富が1パーセントの金持ちに集まり、世界の貧富の差が徹底的に増大した現代社会の戦いは、実は食料争奪戦なのだ。

2065年、あと五十年もすると、地球人口は百億に達するという。現在の七十五億人にさえ不足する食料を百億人分、世界は増産できるのか。まして、世界食料を作り、技術を生み出してきた先進国の人口は五十年後には半減することが統計に明確に表れている。「先進国病」と呼ばれて、人口が減少することは、すでに世界の人々が認識している。

帝国主義や植民地政策が復活し、人間の奴隷化が進むのではないかと危惧される。

そういう時こそ日本の若者に期待したいが、五十年後の日本は、人口六千万〜五千万程度の小さな国になるという。その国力で世界救済の力があるだろうか？

現在の日本は貧富の格差が広がり、低賃金の若者たちはすっかり夢を失い、労働意欲も失って、引きこもりが五十四万人もいるとい

う。国が掲げる一億総活躍時代という謳い文句がいかにも白々しい。

結婚の意欲も無い若者が多く、結婚しない風潮は若い男女の性遺伝子に影響し、今や日本の若者の精子・卵子の生命力は高齢化してしまったというデータもある。少子高齢化はますます深刻になってくるだろう。

今でも、小学校は次々に縮小され、消え、子どもたちの姿は村から消えた。周りは独居老人ばかりで、「あと五年もしたらこの村は消えます」と自ら語る村は数知れない。

出稼ぎに東京・大阪に出た息子・娘は都会で敗北感を舐めない限り、帰ってこない。それなりの家庭を構築し幸福を手に入れて、今更、余命いくばくもない親を看取るために、都会の生活を捨てて帰るわけにはいかないのである。しかし、人間すべてに神がくださった愛・思いやりの感性（孟子が言う「惻隱のそくいん」）

心」が鈍磨して、老いた父母の痛みや孤独の悲しみさえ感じないほどになったのだと思うと恐ろしい世の中である。拝金主義に奔った日本人のあわれな病いと言うべきだろう。

子が親を殺し、親が子を殺す事件が頻々と起こり、無差別殺人も頻発する。障害者無用論を唱えて、自分が勤務する施設の障害者十九人を殺す事件もあった。

鳥にあり獣にあり他人（ひと）にあり我にあり命というは何を働く
宮 柊二

人間は何をしでかすかわからない獰猛な動物になってしまった。現代は人格破壊者があまりに多い。一向に世に愛は広がらず、いじわるな人間は暗闇に棲息し、手下に卑劣な指示を小声で今も下しているのだろう。こうして、いじわるやいじめが日本中に蔓延し、子

供たちの殺人や自殺が絶えない。

神の怒り

こうした有象無象の跋扈する人間界を天から見下ろしておられる神の悲しみはいかばかりだろう。神が泣き叫び、怒る声は豪雨になり、鉄砲水になり、崖を崩し、人家を埋める。地団太踏み悲しむ神の身震いは地震を引き起こし、怒りの波は黒い津波となって、原発を破壊する。

天は人間の善意で支えなくてはならないという思想がある。神は愛情籠めて、一人一人を唯一の存在として創造された。これまで、地球に存在しない貴重な新しい個性として神は愛情込めて一人一人の人間をお作りになったが、親への孝養を忘れ、人間同士争い戦う人間たちは、さらに創造主の神も忘れ、見限り、祈りの心も失って、自分勝手ばかり言っ

て、とうとう人間としての慎みを失ってしまった。これでは、神がお怒りになるのは当然だろう。

恐れを知らない人々には、天が落ちる話など、おとぎ話だが、私は本当に、人間たちの悪意・憎悪がはびこると天が落ちてくるという気がしてならない。そういう基本的な恐れ、つつしみを人間は放棄すべきではないと考える。

モンテッソーリ教育への期待

新しい社会を作るためには、子どもたちの教育が何より大事である。平和を愛し、弱者を労わる心をもった自立した若者を育てる必要がある。私は真のモンテッソーリ教育によって育った若者が、集団として手を組めば、この世の悪弊を一気に断つ力を作れるのではないかと期待する。

日本の鎖国を解き放ち、近代化を獲得し、世界の日本を作り上げた明治維新の力は、薩摩の郷中教育と長州萩の松下村塾の教育力の結束だった。今また教育の力が本当に求められる時代が到来している。

（歌人、華短歌会前代表、吉野幼稚園園長）



参勤交代九州路完歩

澁谷 繁樹



二〇一六年四月九日の夕、北九州の小倉城で散り急ぐ桜を目で追いながら、赤葡萄酒を紙コップで呑んだ。酌み交わす相手は三十三人。ちょうど十年前の〇六年四月二日、雨が降りしきる鹿児島市の西田橋を出発、参勤交代の出水路をできるだけ当時の道に沿いながら歩いてきた。船に乗り込む門司までの僅かな距離は残しているものの、実質、九州路は踏破したあと次第に回る酔いに揺られながら、誰彼と無く「やりましたね」と握手して回った。

出水までの一・一三^キは九回に分けて一年ちよつとで歩き通した。歩きを主催する薩摩

街道保存会は、会員の平均年齢が高く、女性も多い。けがに見舞われないよう、お手洗いでどたばたしないよう、事務局は気を遣った。毎回、傷害保険をかけたが、九州路の全行程を通じて、保険申請をせずに済んだ。すこし足下が怪しくなってきた新聞記者が、熊本路でくるぶしの捻挫に見舞われたくらいだった。

本人からしたら完治に半年もかかったけつこう重い挫きっぷりだったのに、冷や汗と痛みを負け惜しみに紛らわせ、筋肉痛の軟膏を所持していた女性会員が手ずから「うちのダンナにもしたことないんだけど」と塗り込んでくれたのを幸い、人妻の指忘れないふくらはぎ、と戯れ唄に仕立て上げ、長老会員の一人から、ウンさすがに男の子である、と賛辞を頂くおまけまでついた。

薩摩路を終えた段階で、さて次は、となつ

た。一区切りの酒宴つきの事務局検討会議だったし、江戸まで一五〇〇^キ、完歩は夢ではないとの新聞コラムをぶちあげた新聞記者が「目指すは江戸城」とつぶやいたりしたものだから、イッチョやってみるか、と熊本に入した。

水俣から先は、津奈木、佐敷、赤松の三太郎峠が待ち構えている。昼なお暗い国道トンネルの上にそびえる三つの峠を越えていかなければならない。薩摩路までは地元の利に加え保存会会長の事前調査も怠りなく遂行できたが、人様の領地となると勝手が違ってくる。こっちでもあつちでもそっちでもないを繰り返し、三〇^キを超える峠路を気づいたら越えていた。

馬の背を分ける夕立の中を急ぐ広重の五十三次の「庄野」、路の両端は切り通し、三太郎峠も、松の上は空、下は崖の細道が続く。

こんな路を草鞋で江戸まで二ヶ月もかからずに歩き通している江戸人の健脚には、あらためて舌を巻かされた。さまよううちに明治期に貫通したトンネルに迷い込んだりもした。回り道になったとはいえ、真の闇が籠もっているトンネルをおっかなびっくり抜けた経験は、いい酒の肴になっている。

藪から突如として顔を出した歩き人に、昔の路を歩きんしゃつと、そらあ、また、とコンテナいっぱいポカン差し入れてくれた農家のオジサンは元気だろうか。

熊本城の桜も忘れられない。一一年は東北大震災の影響で参加できなかった新聞記者も山鹿からたどる一二年四月の熊本城入りには加わり、美桜美酒に酔いしれた。四年後の倒壊の影すらなかった城。「もう我々の生きているうちは、あの光景は拝めないと思うと、なんととはや」との会員の言葉にうなずきな

がら、西南の役で焼き払った側の子孫だから、復興にも責任があるのかも、と負い目を感じていたりもする。

四〇〇^キを済ませて、残るは一〇〇^キ。
七月に開いた保存会総会で歩き続けるかどうか、話し合った。新聞記者も意見を求められた。「京都の花街で薩摩の江戸人はかなりもてました。借金だらけのくせに社交経費は使い放題といういい加減な政策に乗っかっていたせいもあります。ひとつ、薩摩の平成人はどうなのか、試してみるのも一興かもしれないわね」。結論は続行。寿命と追っかけこの江戸行き、とりあえずは京の都が待っている。

(元新聞記者)



日本人の死生観



十五代 沈 壽官

熊本で震災がおきた。断層に沿って壊滅的な被害だ。天下の名城熊本城もはや見る影は無い。原発立地や再稼動についても活断層の存在がとやかく言われる。僕のイメージの中ではゆで玉子の殻を握りつぶした様なイメージの日本の大地だ。どこと言って安全な場所はない。分かっている。しかし、その事を声高に話す学者がTVに登場すると、チャンネルを変えてしまうのだ。分かり切った事を正論として、とうとうと話しているこの人の人柄に不快を感じてしまう。

それにしても、韓国人によく質問される。『何故、日本人はあの極限の状況の中で、パ

ニックをおこさないのか？我々なら大変な事になるだろう』と。大震災で多くを失っても救援物資が届くとTVカメラに向かって笑顔で謝辞を述べるのである。日本人は、有史以前から大規模な天災に見舞われ続けている。

地震・津波・台風・噴火・竜巻・その度に築き上げてきた家財を失い、一からの出直しを強いられる。まさに復興の歴史である。更にこの天災はこれからも、未来永劫続くのである。こんな自然風土の中、私達日本人は、この世に永遠なものはない。形あるものは必ず壊れる。人は必ず死ぬ。といった無常三原則を叩き込まれてきたのだ。数字者の寺田寅彦は、『日本人には六世紀、仏教が伝来する以前から、天然の無常観が骨に沁み込んでいる。』と説いている。即ち、日本人にとって『死』とは、まさに人生の主題なのである。自分が死後、どのような評価をうけるのかも重大事で

あろう。つまり、いかに死ぬか。である。日本には古来、『切腹』という世界に類の無い自殺の作法があった。浅野内匠頭が、大石内蔵助を切腹の場に呼び、後事をたくす忠臣蔵四段目は、江戸の市民の大喝采を浴びている。日本人は『死』が嫌いではない。

近世でも太宰治・芥川龍之介・三島由紀夫・川端康成等多くの文豪が自殺している。しかし日本人は決して彼らを悪くは言わない。社会に反逆の意思を持って命を絶つことを悪い事と考えないのだ。又、山々が紅に染まる頃、それを眺めながら自らの人生と重ね合わせ、そろそろいいか。などとつぶやいたりもする。どうやら、『死』へのエクスタシーすら感じているようだ。仏教でいうところのニルヴァーナか？これらの根源にあるのは、先述した無常観であろう。

あきらめざるを得ない。という心境である。

翻って世界はどうであろう。いずれの宗教に於いても自殺は厳禁である。生きて生きて、生き抜けという教えである。避け難い運命として『死』は存在するが、自ら進んで死を選んではいけないのである。この差異はやはり、繰り返される天災の存在にある。自然の猛威に「敗ける」というやり場の無い気持ちを繰り返してきた民族のみが持ち得た感覚である。『草木国土悉皆成仏』という独特の死生観であるのだ。因みに『死生』という言葉は日本語以外には存在しない。あるのは『生死』だけである。



飢肥　　小倉処平

― 歴史を訪ねる旅 (6) ―



下土橋　渡

江藤淳は、著書「南洲残影」でいわく、西南戦争における官軍と薩軍の対決は、決して開明派と土着派の対決などという、単純な図式で割り切れるものではあり得なかった。西洋をよく知りながら西郷の軍に投じた者もいたのであると。そして、岩倉使節団の一員として欧米視察を果たした村田新八（西郷の自決を見届け享年42で戦死）の名をあげ、「飢肥西郷」と呼ばれ親しまれた小倉処平、佐土原藩（現宮崎市）藩主・島津忠寛の三男で七年間米国に学びアナポリス海軍兵学校で成業した島津啓次郎（城山にて享年22で戦

死）らの名をあげています。小倉処平もまた官命によって英国、フランスに留学した秀才でした。

一、飢肥藩と小倉処平

宮崎自動車道を田野ICで降りて、見渡す限りの杉の山林を眺めながら、県道28号を40分ほど下れば飢肥に着きます。日向伊東氏5万余石の飢肥藩の居城のあった飢肥は、飢肥城址を中心に武家屋敷、石垣、庭園などの史跡や商家造りの建物が城下町の名残を今なおとどめており、九州の小京都と呼ばれます。1977年（昭和52年）に九州・沖縄地方で初めての「国の重要伝統的建造物群保存地区」に選定された（全国的にも岡山県吹屋とともに我が国で2番目に選定された2地区のうちの一つである）ことから、その伝統的建造物群としての評価の高さが伺い知れます。

名物は、アジやトビウオなど季節の魚のすり身に黒砂糖などを加えて木の葉の形に揚げた独特の天ぷら「おび天」。美味しいものを頂き、歴史に触れながら小京都の佇まいのなかを散策すれば、これこそまさに旅の醍醐味と実感するわけです。

飢肥藩の領地は80年に渡って島津氏と伊東氏の攻防の場となりましたが、12代祐兵が豊臣秀吉の九州平定に付き従い、九州平定軍の先導役を務め上げた功績により領地を取り戻し近世大名として復活を遂げました。

山林と海浜に囲まれた耕地少ない小藩ゆえに財政は決して豊かではなく、約1,000ヘクタールにも及ぶ飢肥杉の美林は、飢肥藩の家臣たちが藩財政の窮乏を救済するために江戸時代の初め山林原野に杉を植林したのが始まりだといわれますし、幕末の飢肥藩は極度の財政難に陥り、嘉永4年（1851年）に

は藩士の家禄を3分の1に減じ、更に6年後には儉約令を出すほどでした。そんな中で教育熱心で、11代藩主・祐民の享和元年（1801年）に学問所を設け、これが天保元年（1830年）に藩校・振徳堂となりました。

小倉処平は、1845年（弘化3年）飢肥藩の中級藩士・長倉喜太郎の二男として生まれます。少年期を振徳堂に学び、18歳のとき同藩士・小倉九十九（つとむ）の養子となります。1864年（元治元年）に藩命で京都に出、藩の外交に飛び回りまわり、帰藩すると振徳堂の句読師（読み書きを教える人）となり、また寮舎長にも選ばれました。小倉の指導理念は、広く世界へ目を向ける必要性を説く進歩的なものだったといわれ、塾生から尊敬を集めていたそうです。間もなくして江戸に出て、飢肥藩清武郷（現宮崎県清武町）出身の儒学者・安井息軒の門下生として江戸の三計塾に



飢肥城大手門。1978 年（昭和 53 年）に、樹齢百年の飢肥杉を使用し、釘を使わない「組み式」で復元されました。



武家屋敷通り（馬場通り）。飢肥藩屋敷の典型的な姿を色濃く留めています。

学び、このとき、同じ門下生であつた陸奥宗光や谷干城（たにたてき）（第2代学習院長）らと交流を得ます。

二、小林寿太郎と小倉処平

1861年（文久元年）、小柄で病弱ながら頭がよく、とても好奇心旺盛な6歳の男の子が振徳堂に入学してきました。大家族で豊かとはいえない環境にあつたその男の子は学費免除のため、学校の掃除、生け垣の刈り込みなどの仕事をしながら人一倍勉学に励み評判となつたそうです。のちに陸奥宗光に見出され、外務大臣、ポーツマス条約の全權大使として活躍する小村寿太郎でした。

早くから寿太郎の非凡な才能を見抜いていた小倉処平は、1869年（明治2年）、特例の推薦を藩に上げ、15歳でないと入寮できない振徳堂東寮に14歳の寿太郎を入寮させます。そして、寿太郎をより良い環境へ導

くべく公費による留学制度を藩主に進言し、自ら引率して長崎の洋学校・致遠館に遊学させます。さらに、大学南校（現東京大学）に進学させるべく寿太郎を伴つて東京へ旅立ちます。しかし、当時の大学南校は雄藩出身者で独占されていました。そこで、処平は、小藩出身の人材にも等しく勉学の機会を与えるべきだと「貢進生制度」を政府に建議し実現させ、小村寿太郎を入学させました。これによつて、寿太郎は後に大成する契機を得たのでした。

三、小倉処平留学、そして帰国

「貢進生制度」建議の功績によつて文部権もんぶけん大丞だいじょうの職についた処平は、官命によつて英国、フランスに留学して、政治や経済を学びますが、数十名の留学生の内、学識において処平の右に出る者はいなかつたといわれます。また、その風采は、のちに郷党から「飢肥西郷」



飢肥藩校・振徳堂。孟子の教えにある「又從而振徳之」
(また疑いてこれを振徳せり) より名づけられました。



「小倉處平顕彰之碑」(振徳堂敷地内)



武家屋敷通りの一画にある小村寿太郎生家

と呼ばれ親しまれたように、生来肥満堂々とした風貌だったといわれます。

処平は最初、教育制度を調査するためにアメリカに向いましたが、途中で、植民地となった国民の姿を目にしたとき、政府による性急な欧米化政策や藩閥政治による弊害に大きな危機感を抱き、当初の予定を変更して、親友の香月圭吾と共にイギリスに渡って、経済を研究することになりました。

留学の途について2年後の1873年（明治6年）冬、国内で征韓論が決裂したことを知ると急遽帰国。西郷隆盛・板垣退助らが下野すると、自らも飢肥に帰郷。翌年、明治政府に対する士族反乱の一つである佐賀の乱が勃発し、敗れたリーダーの江藤新平らが処平を頼ってひそかに飢肥へ潜入してくると、港から土佐へ逃亡させました。その罪で小倉処平は禁錮刑に服するも、その後、大蔵省七等出

仕となります。

四、西南戦争

1877年（明治10年）2月、西南戦争が勃発すると、「日向の人心を鎮撫してくる」と唱えて帰郷しましたが、すでに飢肥士族300名が前線にあることに義を感じた処平は自らも身を投じ、飢肥隊の総帥として、人吉撤退後は野村忍介率いる奇兵隊の奇兵隊軍監として、各地を転戦しました。

しかし、西南戦争最後の決戦となった同年8月15日の「和田越の決戦」（現宮崎県延岡市）で、政府軍は、薩軍3500に対して5万の兵で攻撃。処平はこの戦いで大腿部に銃創。敗走後、延岡市川坂の神田伊助宅に逃れて加療。

一方、敗れた薩軍は長井村に包囲され、俵野の児玉熊四郎宅に本営を置いた西郷隆盛は翌16日、解軍の令を出し、可愛岳突圍を決

め、約600名の精鋭部隊が17日夜10時に児玉熊四郎方を発して可愛岳に登り始めます。神田伊助宅で加療中このことを知った小倉処平は西郷の後を追ったものの果たせず、可愛岳登山口から南西約1キロメートルのところにある高畑山の中腹で自刃。惜しまれる32歳の若さでした。自刃の地には碑が建てられています。



「飢肥西郷小倉処平自刃之地」の碑

【参考にした図書とサイト】

- ・江藤淳著「南洲残影」(文藝春秋社、1998年3月初版)
- ・小村寿太郎侯顕彰展資料 小村寿太郎侯と藩校振徳堂の教官たち
- ・みやざきの101人⑥小倉処平

―補遺―

非凡な才能を持ち、かつ人一倍の努力家ながら不遇の連続だった小村寿太郎には、幸運な、二人の人物との出会いがありました。幼年期から青年期にかけての小倉処平とそのちの陸奥宗光です。寿太郎は、第1回文部省海外留学生に選ばれ米国ハーバード大学へ2年間留学し法律を学びました。それでも優秀な成績を修め、身長143センチという小さな体の寿太郎に対して他の学生たちが帽子を脱いで挨拶するほど尊敬されたそうです。小

村寿太郎と小倉処平の年譜を突合せてみると、ハーバード大学入学が1875年、寿太郎21歳のとき。佐賀の乱が勃発した翌年のことでした。そして、小倉処平が延岡の山腹で自刃したその年に、寿太郎はハーバード大学法律科を卒業しました。それから3年後の1880年に米国留学を終えて帰国した小村寿太郎が真っ先に向かったのが小倉処平の墓でした。寿太郎はそこでいつまでも号泣し続け、立ち去ることがなかったといわれます。

(元九州職業能力開発大学校教授)



京都浄福寺

— 歴史を訪ねる旅 (7) —

下土橋 渡



著者の住む鹿児島さつま町内にある中津川地区の弓之尾集落の男性たちは惚れ惚れするほど手踊りが上手で、結婚披露宴や各種イベントなどからお呼びがかかるほどです。同集落には、無資格社ながら鳥居や瓦に島津家の定紋である「丸に十の字」の家紋をあしらった大石神社という小さな神社があります。この神社の九月の例祭には、約四〇〇年の歴史を有するとされる「金吾さあ踊り」(さあは様の意味)という踊りが毎年奉納されていて、弓之尾集落の男性たちの手踊りはその伝統に培われたものなのです。

中津川と同じ旧薩摩町内の求名に生まれ育った著者の、今は亡き母が弓之尾集落の出身であったことがあって、幼いころ手を引かれ、片道一〇数キロの道のりを歩いて踊りを見に連れていかれたことをうつつすら覚えています。その頃は、神社をぐるりと一周り囲む松林の木もまだ小さく、木々の間から中津川小学校やその周辺の田園風景が見下ろせたものですが、今はうつそうとした松林になっていて、見えるのは、見上げて見える、松林で丸く切り取られた空だけです。その大石神社に祀られ、今でも「金吾さあ」と呼び親しまれている人が誰で、どういう人だったのかを知るに至ったのは恥ずかしいながら五〇という歳を超えてからのことでした。

一、北薩摩秀吉の道

薩摩郡さつま町(旧宮之城町) 船木の自宅の数百メートル南を「北薩摩秀吉の道」とい

う教育委員会の標柱の立った道が東西に通っています。道は、すぐ東で急峻な山裾にぶち当たり、あとは尾根へ続く険しい山道になっています。

九州征伐において、天正十五年（一五八七年）五月、川内の泰平寺（現薩摩川内市）で島津義久の帰順を見届けた豊臣秀吉は、帰路ここ祁答院領を通過します。しかし、領主島津歳久は病気を理由に謁見に出て来ないばかりか、家臣に命じて秀吉軍を巧みに陰相な山道に誘い入れ、秀吉の駕籠に矢を放たせたのです。秀吉は別の駕籠に乗っていて難を逃れ、鶴田（現さつま町鶴田）の梅君ヶ城に入城。そこに駆けつけて来た次兄義弘から降伏の意を受けます。

その後も秀吉への帰順を拒否し続けた歳久でしたが、九州征伐から五年後の天正二〇年（一五九二年）六月、島津氏家臣梅北国兼

が熊本の佐敷で起こした謀叛（梅北一揆）に歳久の家臣が多く参加していたことが知れるに至り、秀吉の怒りは頂点に達します。同年七月、秀吉の命によって長兄義久の追討を受け、歳久は竜ヶ水（鹿児島市吉野町）に自害して果てました。享年五十六。

二、島津歳久

島津歳久は、天文六年（一五三七年）、伊作（現鹿児島県日置市吹上町）の亀丸丸城に生まれます。父は島津宗家の養子になって十五代守護職を継いだ島津貴久公。母は入来院重聡の娘の雪窓夫人。島津氏中興の祖といわれる祖父の忠良（日新斎）から「始終の利害を察するの智計並びなく」という評価をされ、若年より父の貴久や兄の義久、義弘を助けて数々の合戦で活躍しました。

秀吉の九州征伐の際、家中が抗戦へ傾く中で秀吉を「農民から体一つで身を興したから



御石山 JR 日豊本線・重富駅の約 300m のところにある。歳久の遺体はここで清められ、首は肥前名護屋城の秀吉のもとに届けられ、胴体は帖佐の総禅寺に葬られた。2008 年 7 月撮影。



総禅寺跡の歳久墓所跡（始良市帖佐） 胴体が掘り起こされて平松神社に改葬されるまでの二百数十年間埋葬されていた場所。2008 年 7 月撮影。

には只者ではない」と評価して、四兄弟中ただ一人上方との和平を唱えたといわれます。しかし、秀吉と戦うことになると、今度は徹底抗戦を主張、義久・義弘が降伏後も最後まで抵抗しました。

自害後、歳久の胴体は帖佐（鹿児島県始良市）の総禅寺に埋葬され、一方、首は肥前名護屋（佐賀県唐津市）にいた秀吉のもとに届けられ、首実驗の後さらに京都に送られて、一条戻橋にさらされました。ところが、ちよ

うどその時期に、歳久の従兄弟に当たる島津忠長という人が京都に来ていて、大徳寺の玉仲和尚と図って、市来家家臣にそのさらに首を盗みとらせ、浄福寺に埋葬したのです。

それから二八〇年の永きにわたって首は浄福寺に埋葬されますが、明治五年（一八七二年）、歳久の末裔に当たる日置島津家十四代島津久明が京都に上り、首を掘り起こし鹿児島

島に持ち帰り、一方、帖佐（鹿児島県始良町）の総禅寺に埋葬してあった胴体も掘り起こし、一体にして、竜ヶ水の平松神社（心岳寺）に改葬しました。実に二八〇年を経て、首と胴体と一緒に埋葬される状態に至ったわけですが、さらに大正の終わるか昭和の初め頃に、日置島津家の菩提寺だった大乘寺跡（現日置市日吉町）に改葬され、現在に至っています（島津金吾歳久公四百年祭志、島津修久著「悲劇の武将・島津金吾歳久」を参考）。

三、京都浄福寺

京都に行ったら是非、浄福寺を訪ねたいと思っていたところ、二〇〇八年九月、妻と一緒に京都に行く機会がありました。妻が同伴のときは、ホテルの予約はもっぱら妻任せ。妻が予約したのは都合のいいことに、堀川通り二条城前の京都全日空ホテルでした。ホテルを出て堀川通りを一キロ足らず北上すれば

一条戻橋です。歩いて行ける距離なので、チエックアウトまでの時間を利用して一人で出かけました。

一条戻橋の東は、数百メートルで京都御所の敷地。その北隣には同志社大学今出川キャンパスがありますが、島津歳久の首が一条戻橋にさらされた頃の浄福寺はそのあたりにあったそうですから、なるほど首を盗んで走り去り、埋葬するのに都合が良かっただろうと思われます。浄福寺はその後、一条戻橋から六、七百キロ西の現在の場所に移転しました。

現在の浄福寺は、境内に幼稚園を有するほどの広さなのに、観光寺ではないので、静かな佇まいのなかに本来の京都らしい寺の雰囲気を感じられます。全体に朱が塗られた門を有することから赤門寺と呼ばれ親しまれ、織物を核とする西陣の町屋が軒を連ねる門前の通りは浄福寺通りと呼ばれています。

広い境内を隈なく歩き回っても歳久に由来のあるらしいものは何も見当たらないので、社務所に尋ねてみることにしました。訪いを入れると年配のご婦人が出て来られ、このお寺は何代も住職が替わり、寺歴の記録もないので分かりませんとおっしゃいます。島津歳久の名すらご存知ない様子でした。ただ、口伝えですが、入口の柱に残っている刀傷は、幕末にこの寺を宿舎とした薩摩藩の藩士たちが付けたものだと聞いておりますと話して下さいました。お礼を述べて辞するとき柱を見てみると、なるほど刀傷がありました。

ほとんど知られていないと思いますが、司馬遼太郎氏の短編に、浄福寺の薩摩藩士のことを書いた「薩摩浄福寺党」というのがあります。ちょうど、薩摩藩邸の奥座敷で、坂本龍馬仲介のもと、薩摩側の代表、小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通と、長州側の代表、桂



島津歳久の首が埋葬された浄福寺（移転後）＝京都市上京区。朱が塗られた門を有することから赤門寺と呼ばれ親しまれている。



幕末に薩摩藩士が付けたという浄福寺本堂の柱の刀傷

小五郎、品川弥二郎が、薩長連合の密談を行ってゐる頃の、肝付又助という薩摩藩士のぼつけもん（向こう見ず）のことを書いた短編です。短編には次のようにあります。

—薩摩藩では、錦小路（現在・京都大丸裏）にふるくから藩邸があつたのだが、これでは足りないため、現在の同志社大学のあたりに二本松藩邸を造営し、それでもまだ不足があつたので、西陣の浄福寺の客殿、本坊などが借りあげられたのである。この浄福寺を寮としてゐるのは二十人ばかりの下級藩士で、年も若く、妙に乱暴者ばかりがあつまつた。自然たれがいうともなく、浄福寺党という異名で呼ばれた。—

安政五年（一八五八年）の安政の大獄で追いつめられた西郷隆盛は、僧月照と一緒に、鹿児島湾で小舟から身を投げますが、そのとき西郷は月照に歳久の話をし、自害の地に

建てられた心岳寺の方に一拝を求めた上で飛び込んだそうです。また、往時の祥月命日には、歳久の御遺徳と壮烈なる最後を偲んで、鹿児島三大詣りの一つとして、「心岳寺詣り」が盛大に行なわれたといわれます。このように歳久は没後も永く、薩摩武士や薩摩の人々に深く崇敬されてきた人でした。

司馬遼太郎氏が島津歳久のことを知っていたのか知らなかったのか、短編で歳久のこととは何も触れられていませんが、浄福寺党は浄福寺が歳久ゆかりのお寺であることは当然知っていたはずで、浄福寺に格別の思い入れを持つていたに違いありません。歴史の因縁の妙というものを感じながら、寺を後にした京都浄福寺の訪問でした。

四、金吾とあ踊り

島津歳久は、天正八年（一五八〇年）から五十六歳で死去するまでの十二年間を祁答院



金吾さあ（島津歳久）を祀る大石神社。無資格社ながら丸に十の字の島津家家紋があらわれています。 2008年8月撮影。



「金吾さあ踊り」の一つ「鷹刺し踊り」（さつま町中津川弓之尾集落の皆さん） 2005年9月撮影。



「鷹刺し踊り」の一コマ。約400年の伝統に培われた「金吾さあ踊り」の踊り手は惚れ惚れするほど上手です。 2008年9月撮影

十二郷（現在のさつま町の佐志、湯田、時吉、虎居、平川、船木、久富木、鶴田、紫尾、柏原、求名、中津川）の領主として、虎居城（現在のさつま町宮之城）で過ごしました。

その役職名が唐名で金吾といわれていたことから、地元では金吾さあと呼ばれ親しまれてきました。歳久公は自害のとき、「風疾」を患っていて刀が握れず、「妊婦が産に臨むときの苦しみはこのようなものであろうか」と石をもつて割腹しようとして、家臣に介錯させたと伝えられています。このような言い伝えから、金吾さあを祀るさつま町中津川の大石神社は、卵ほどの石を奉納して安産を祈願する妊婦が多く、武の神とともにお産の神として崇拜させてきました。その大石神社では、現在でも毎年九月、「金吾さあ踊り」が盛大に行われ、金吾様の遺徳を偲んでいます。

（元九州職業能力開発大学教授）

時の過ぎゆくままに (6)

生はいとしき蜃気楼

(高成長期を追いかけた戦中派しんがり)



桐野 三郎

※ ンダモシタン

もう憶えている人もほとんどいないと思うが、せっかく宝くじで当たった二億円をそっくりそのまま、慈善団体に寄付して話題になった人がいた。

と、その一両日後の地元新聞の「ンダモシタン」欄に「どっちが気持ち良かったですか、二億円当たった時と寄付した時とでは？」という投稿があった。なるほど、せっかく当たった二億円をそのまま寄付、もビックリだが、どちらが気持ち良いだろうか。当たった時と

寄付した時では？ 僕はその投稿氏のユーモアセンスに感服した。

宝くじも、二億円当たれば僕らにとつてはオンの字、青天の霹靂（へきれき）と言ってもいいぐらいの好運だ。天にも昇る良い気分だろう。しかしそれをそっくりそのまま寄付した時の気分、僕らの身分では想像もできないがこれまた素晴らしい気持ちではないだろうか。清々すがすがしい、とても言うしかないが。

当時、地元文芸誌「随筆かごしま」にエッセーを連載させて貰っていた僕にとつては、絶好のネタだった。だが、とは言っても清々しい美挙をそのまま誉めそやすだけではさすがに芸がなさ過ぎる。すぐ頭に浮かんでくるのがリッチな友人や知人が口にしたがるイヤ味、

「貧乏人に限って金を汚かいもののようにバカにしたがるけどね、この世の悩みの九十九パ

ーセントは金で解決できる、というのが厳然たる世間の常識なんだよ」なんていうあのセリフだ。あれこれ思いめぐらせたあげく、僕が最後に決めたエッセーのタイトルは「残り一パーセントの問題」だった。

話題が、ことゼニカネの話となればやつぱり興味が湧くのだろう。エッセーの評判も良くて、新聞も一面のコラムで話題にしてくれた。

さて前置きが長くなったが、ところで何故そんな大昔の話をいまごろ僕が、さも自慢げに持ち出してきたか、だが。これはもう皆さんご存知のこの春の東京都知事、マスゾエ氏の辞任劇だ。東大出の秀才といわれるオッサンが、たったあれだけの金銭をチョロまかした上に、何としても言い逃れようとする見苦しさ、繰り返しテレビであの情けない姿を見

ているうちに、ふと「昔はあんな清々しい話もあつたよなあ」とつつい古い記憶が甦ってきたというわけだ。

いや、それだけではない。この際白状するが、僕は内心に大きなコンプレックスを抱えながら長年生きてきたのだ。自分の経歴を書くとき、出身大学はともかくとして、学部名まで書く場合である。学部は経済学部、ウソいつわりはない。「お前は経済学部出身のくせに」とか「経済学部出身じゃなかった？」などと、若い頃から親父やおふくろに怒られたり皮肉られ、兄たちからは「経済学部で何を勉強したんだろう！」と露骨にバカにされてきた。妹たちはさすがに面と向って攻撃はしないが「三ちゃんだけは何故あんな金使いが許されるわけ？」などと、何度嫌味を聞かされたことか。つまり「三郎はカネにルーズでだらしない」という烙印を、若いころから押

されていた、と言われても仕方がないのである。

でも、とは言っても親兄妹の大半はもう他界しているから時効だが、息子や娘はいまや壮年、孫も大勢いる。彼等に焼きついている僕という父親像は、もう長いこと聞かされてきたあの「カネにだらしない、甲斐性のない老いた父」でしかないだろう。事実、彼等の大学時代の学費の大半は奨学金やバイトで賄われてきたし、さらに二人の息子がアメリカの大学に行ったのも、ロータリー財団の援助だったことなど考えれば、とても「俺たちが苦勞して育てた」などとは言えはしない。しかし、それもちろん自業自得。この歳になれば今更イメチェンなどできるわけがない。僕はすでに観念していた。

とそこに、天から降って湧いたような舛添知事の辞任劇である。「他人の不幸は蜜の味」。

すぐ思い浮かべたのがこの言葉。とたんに僕の人生は再び明るくなった。

東大出の東京都知事のあのセコさに比べたら、自分のだらしないなど屁でもない。良く考えれば恥ずかしいことなど何ひとつしたわけではない。親に貰ったカネが兄妹の誰よりも多かったのは単に他の誰よりも僕の交渉テクニックが旨かった、というだけの話だし、家庭を持ってからのカネ使いも大部分は取引先や友人、部下たちとの飲み食いだ。浪費、というより、人間関係円滑化のための先行投資という面が大きかった。しかもそのカネは盗んだわけでもチヨロまかしたわけでもない。まぎれもなく自分で稼いだカネだ。さらに言えば、そのために子供たちに多少の不自由をさせたことも、教育上はむしろ効果的だったのではないか。

マスゾエ辞任劇は、はからずも僕の永年の

コンプレックスを吹き払い、残りの人生に明るさを取り戻させてくれた。僕の好運はまだまだ続きそうである。

※ 人生は楽しむためにある

僕が職業意識に係る講演を聞いたのは、学業を終えて社会人になる前後、つまり戦後十年目頃。どこで何というセミナーだったかは覚えていないが、講師は東大教授だった矢内原伊作氏。

日本流の職業意識と欧米流のそれを対比させて判り易い説明だったから、粗筋だけははつきり覚えていて。大略、日本流のそれは例えば徳川家康の言の如く、人生は重い荷を背負って長い道を往くようなものだとか、二宮尊徳のように働くことこそ善なり、などと、まだ戦後の労働意識は整理されていない。それに比べると西欧社会では特に産業革命以後、

何を今頃、そんな分かりきったことを聞くのか、という位はつきりしている。

それは「人生は楽しむためにある。楽しむためには金が必要。金を得るためには働かなければならない。労働とは喜びに至るまでに通り過ぎなければならない苦痛である」というのだ。僕は深く納得した。「よし、俺はこれからの人生、この欧米流で行く」と。

中でも強い説得力を感じたのが、楽しむためには金が必要——という、その金の多寡に関する説明だ。必要なのは *some money* (サム・マネー) つまりいくらかの金。人それぞれに楽しむために必要な額というわけである。

わが国では古来「豊かな暮らし」とはイコール「金持ち」みたいな常識がまかり通っていたが、真の豊かさとはこの人生をいかに「楽しむ」にかかっているのであって、金はそ

の手段に過ぎない。社会人としてのスタート時点で、胸中にその考え方だけははつきりとインプットされた。

しかしそれ以前に、そんな考え方を受け容れるような人間性の核みたいなのが、自分の中に醸成されたのはやはり高校時代の美術部だろう。男女共学が始まったばかりの新制高校一期生。旧制中学と女学校が合併した直後だけに美術部教師が二人。鯨津、鮫島と、県下ではそこそこ知られた画家だったが、なんと鯨津先生は海老原喜之助画伯と独立美術の盟友、鮫島先生は吉井淳二画伯と美術学校時代の同級生。時折来訪されるこの著名画家たちと、時にはお茶など一緒に飲みながら、パリ画壇の話なども聞けるという恵まれた部活だった。

美術室だけではないが、部屋の外壁は鳶に

覆われているため鳶の葉を通した緑の光が窓から差し込み、放課後石膏デッサンなどしていても、日暮れまで飽きることがなかった。もちろん美術部には美人部員が多かったせいもある。しかしいまひとつは、部屋に立ち込めていた、あのテレピンオイルの匂いのせいもあつたのかもしれない。同じ揮発性、テレピンにはシンナーと同種の効果があるので、は？ などといまごろになって思い出したりもしている。

しかも思えばそれよりほんの五年前は防空当番のために、その校庭に掘られた防空壕の中で恐怖に打ち震える夜を幾度も経験した、中学2年生だったのだ。それを思えばあの頃の美術部は楽園であつた。



※ 糸の切れた風のように

僕が生まれたのは三十一年。日本が中国大陸に侵略をはじめて満州国が誕生した年だ。小学校入学直前の三七年には日中戦争にひろがり、四一年（小学校四年生）には太平洋戦争に突入した、という世を挙げて国民皆兵の時代。

どうせ徴兵を免れないなら海軍兵学校に行こう。その願望は早くからあった。まずは海兵制服のカッコ良さ、それに海軍の方が強行軍などないだけに陸軍より楽チン。それ位の浅知恵だった。放課後は学舎（郷中教育）に通って角力や水泳に興じ、学校内では海洋少年団に入り、手旗信号やモールス信号などに熱中した。

という意味では、それなりに時代への適応能力は持っていたのかもしれない。その延長線上で当時軍人学校（海兵、陸士など軍人養

成学校への合格率が高い）と呼ばれていた中学にはいったのだから。さらにいま思い返せば、終戦の二年生時（四五年）には級長をしていたのだと思う。校庭では合同朝礼のとき先頭に立って、大声で号令をかけていたような記憶が残っている。つまり、あの年の八月十五日まで、僕の才能と努力は海兵合格という一点に向ってかなりいい線まで行っていたのではないだろうか。

だが、あの七一年前の八月十五日を境に、天と地がひっくり返った。まさかの日本敗戦である。突然、自由といういままで吸ったこともない異種の空気の世界に放りこまれたのだ。新制高校発足までの四年間はまさに糸の切れた風のように、その得体の知れない新しい空気の世界を浮遊していた。そのため校内学業成績も、ビリから数えたほうが早い位の順位まで下がったことがある。

それでいて、大学受験まであと一年となつた高3になってからも、僕はまだ南日展に出品する絵に熱中していた。

「東京芸大を受験したい」と言い出したのは九月頃からだ。

「絵描きなんかになって飯が食えるわけがない」というのが親父の意見。「芸大なんかに入ったら学費は一銭も送らない」とまで言い切った。

父の意見にあまり抵抗しなかった理由は、学費もだが、万が一合格しても卒業後の職業がとりあえずは教職ぐらいだろう。というその教職という職業が、糸の切れた風状態の僕にはひどく固苦しい仕事のように思えたからだ。

付け焼刃のにわか勉強で受けた在京大学に見事に落第。予備校入学のために上京した。

東京は駿河台にある予備校での一年間。正

直に言うが、僕が「努力した」と言えるのは生涯の中で（戦後では）この一年間だけ。振り返ってみてつくづくそう思う。もちろん、その後の実社会で仕事に熱中した経験は数えきれないほどある。が、それは全て賃金を得るため、仕事そのものを楽しんでいる部分の方が大きかった。という意味で努力したという記憶とはほど遠い。

しかも、努力したと言う一年間にも、下宿に帰る途上、新宿名画座に立ち寄っては二本立て洋画を観た記憶が何回かあるから、高のしれた努力だったに違いない。

※ 二つの大学に通った四年間



大学は経済学部を選んだが、その理由は結局「どっちに転んでもツブシがきくように」という程度のよくあるケース。つまり「これで飯が食える」という、人並み以上の才能が

何ひとつなかった僕の選択だった。

それでいて、一年先に芸大に合格していた親友には「お前なんか絵という才能しかないからいいね。迷わずに済むから」などと憎まれ口を叩いたのを覚えている。「俺なんか才能が多すぎるから迷うんだよ」などと。

そんな大学時代を、出席率から先に振り返れば、一年次が6割、二年次5割、三年次3割、四年次2割、という程度の尻すぼまり。

無論、入学当初はそこその向学心はあった。殊に歴史を誇る学内図書館などは入学前からの憧れだった。でもそこそこ出入りしたのは入学した年の夏ぐらいまで。

読書に飽きた頃、館内で学友たちと話題になった。人間一生のうちに何冊ぐらいの本を読むものだろうか、と。

「知識層といわれる人たちで、普通、二、三千冊、多くてもせいぜい五、六千。大学の先

生など、本を読むのが仕事みたいな人達でさえ二、三万冊が限界だろうと聞いたことがある。」そう教えてくれたのが横浜出身の級友だった。

「じゃ、一生かかってもこの館内の一パーセントの本も読めないわけか！」と、匙を投げ出すように大きな伸びをしたのが大阪出身の男。当時、図書館の蔵書は七十五万冊と聞いていたからだ。横浜出身が続けた。

「だから昔から言うじゃないか。先ずは自然から学べ。次は先人からだよ。つまり古老とか先輩や先生さ。三番目が本からだよ」

この日を境に僕の図書館通いは激減した。だが、この日の記憶がはつきり残っているせいだろう。最近でも「本を読め」という、いわゆる知識人がやたら多いのが気になって仕方がない。「違っだろう、先ずは自然からだよ」と反発したり、たまには「自分は一体何冊読

んで、偉そうなこと言ってるんだ？」などと腹の中でつぶやいている。

話が脇道にそれた。で、話を元に戻して、大学をサボって何をしていたかだが、まず最初は自分の大学をサボって上野の芸大に遊びに出かけることを覚えた。酒匂という親友と校内の美術室や彫塑室ほか、上野公園内にある美術館や博物館めぐりなど。でもしばらくすると同じ芸大でも、美術部より音楽部の方が美人が多いという理由で、道路ひとつ隔てた音楽部のコンサートにはいり込んだり。思えば芸大の校内食堂ではツケが利くぐらいだった（酒匂名で）からかなりの頻度だったのかもしれない。

アルバイトは家庭教師をほんの数回。進学を狙っての依頼ばかり。でも、とても進学させる自信の持てるような子供とは思えず、途中で逃げ出す理由を見つけるのに苦労した。

一番長かったのは画家の家に下宿していた一年半。家主のアトリエに通っては、彼の代わりに教えることもあったが、大半はその生徒たちと仲良くなつての遊び、が多かった。

マージャンやダンスも覚えた。ジャズ喫茶にしけこむこともあったが、何より増えていったのが呑み屋通いだった。とりわけ新宿は駅の南口に近い「リラ」という居酒屋は、僕にとって特別な存在となった。四年間に通った回数は大学に通った日数に匹敵するほどだったと思う。

リラに最初に連れて行ってくれたのは芸大の酒匂だった。そしてその夜まつ先に会ったのが常連だという東大生（といっても旧制の）二人。なんと同じ鹿児島県で、しかも同じ中学（といってもお二人は旧制）の先輩だという。その上、二人とも、僕が子供の頃から目ざしていた海兵帰りだということではないか。最

初の夜から、どこか因縁めいた引力に囚われたのも無理はない。

呑み屋といえはその頃から、新宿にはピンからキリまで星の数ほどあった。リラは勿論キリの方。飲み物は一杯三〇円のブドウ割るか梅割りの焼酎がほとんど。食べ物なんぞほんの数種の簡単なものだけだが、なにせ商売は、自分の母親と同じ年頃のおばさん一人で仕切っているのだ。七、八人の客で一杯、十人もはいれば超満員という店の、その気安さがおのぼりさん同然の僕らには有り難かった。リラのおばさんには美人の娘さんが一人いた。女子大学に在学中で店を手伝うことなど殆んどなかったが、その友達なんかと連れ立ってたまに店に遊びに来ることはあった。学生客の多い店にとっては、それもひとつの魅力になっていたかも知れない。

しかし、僕自身にとってもそうだが、あの

店は客が客を呼んでいた。つまり、今夜は多分来ているであろうあの人と語りたい、或いは話を聞きたい、等々。今振り返っても多くの人にとってそんな存在だったような気がしている。

長老格の客としては直木賞作家の榛葉英治しんばさんや杉森久英さんも時折顔を見せていたし、その他美術や音楽、マスコミ系や、それを目指す大学生などという男女がたむろして議論などしていることが多かった。

しかし、ではおばさん一人だと退屈するのかといえ、それが又とんでもないのだ。日本文学もだが、お茶やいけ花に映画や演劇など造詣の深さには驚かされ、退屈することなど一度もなかった。忘れもしない、歌舞伎を僕がはじめて見たのもリラのおばさんに連れられてだった。

大学の同級生のほとんどが就職もきまり、卒業を前にそわそわしているときも、僕は学校をサボって落ちついていた。

どう考えたって出席日数が規定よりはるかに少ない。誰が考えても卒業できるわけがない。そう決めて、留年を覚悟していたからだ。

ところが土壇場で担当教授に呼び出された。「残念ながら、出席日数が大幅に不足してますね」と案の定、予想通りの宣言。

「はい、覚悟していました。仕方ありません」と僕も素直に返した。

ところが意外にも、教授は「でも試験の成績は合格圏内なのに勿体ないですね。欠席が多かったのには、それなりの理由があったんでしょね？」アルバイトで忙しかったとか・・・と、まるで誘導尋問のように続けられるではないか。

意外な展開にはびっくり。でもここで誘導

に乘らぬ手はない。ぼくは期待を押し殺して、極力まじめな顔で答えた。

「もちろんです。地方から出て来た者にはいろいろと・・・」

一呼吸おいて教授は宣言した。

「では出席が足りなかったその理由を、書類にして提出しておいて下さい」

卒業が決まった日は飛び上がるほど嬉しかった。一年間の丸儲けだ。だが、またすぐ気になり出したのが、借金の整理。もちろん家からの送金も卒業となれば、若干の上乗せは可能だろう。問題はリラにたまっているツケの残額である。

もちろん最初の頃は僕も現金で飲んでた。それがいつしか、おばさんの家族みたいな感覚で甘えるようになり、ツケが当り前のようになっていたのだ。でも卒業が一年遅れるの

だからゆつくり考えればいい。そう考えていたのに、突然決まった卒業。ツケの残額はとも若干の上乗せ程度で済ませる額ではないはず。

しかし、卒業できた報告かたがた、まずはツケの残額を聞かないことには始まらない。

その夜、卒業の報告にはおばさんはもちろん、常連客数人も祝盃を挙げてくれた。しかし他の客の前でツケの残額など聞けるわけがない。おばさんと二人きりになったのは終電近くになってからだ。僕の肝腎の質問に、笑いながら、帳面を取り出して示してくれた金額は予想どおり。といっても当時の学費、三年分ぐらいの額である。

しかし、こちらが返事を探しているうちに、おばさんが言ってくれた。

「でも、これ全部桐野ちゃんの卒業祝いで消しておくから、ゼロよ」

ところでこれを今、僕は記憶を頼りに書いているが、戦後六年から十年頃までの話だ。新宿にはまだ戦争の傷痕があちこちに見られ、駅のガード下では白衣の傷病兵がハーモニカで「異国の丘」を吹きながら通行人に喜捨を乞うていた時代である。

リラのあったあたりも、今は高層ビルの立ち並ぶ近代都市と化して往時を偲ぶようなど何ひとつ残っていない。書いている自分でもふと、「あれはひよつとすると蜃気楼ではなかったのか？」と思えてくるほどだ。

だが、先年、ノーベル賞を受賞された赤崎勇氏も、その同級生で、新聞紙上で語っておられた財界の海江田順三郎氏も僕らの中学の先輩。僕らがリラで薫陶を受けた栗脇さんや吉満さんたちとご同級だったはず、と考え合わせれば夢や幻であったはずはない。

だから僕はいま想うのだ。四年間に二つの大学を卒業したと。いや、それ以上を学ばせて頂いたのかもしれない。

そしてリラのおばさんは、僕にとつてはすくなくとも大学の教授と同じような存在だったと。

※ 怪我の功名



学業を終えて郷里に帰ってきたのは、元々かごしま大好き人間だったせいもあるが、東京でだけは絶対に暮らしたくないと想っていたからだ。

国電の混雑ぶりである。まるで家畜でも押し込むように駅員が渾身の力で客を電車に押し込む、毎朝あんな扱いを受けて職場に通う。そんな人生なんて真平ごめんだ。早くからそう決めていた。

老舗の百貨店に入社した。最初の配属が一

階の販売課。一年経って主任となったのはいが、同時に早くも出張を命じられたのには驚いた。

「神戸は三之宮にダイエーというスーパーマーケットなる形態の一号店が出現したから、お前はとくと見て来い」というのだ。その社長は神戸三中出身で、中内功というフイリッピン戦線の生き残りということまで知らされた。というのは、当時のわが社の副社長が神戸三中の出身で、中内功はその後輩というわけだった。戦後も十二年が過ぎ、日本経済がまさに、急成長に突入しようという時代である。

ダイエー一号店は焼け残った映画館を改装した、だだっぴろい空間に粗末な販売台をたくさん並べ、その上に食品をはじめとする日用雑貨が山盛りに、といってもいいぐらい豊富に積まれていた。いまはそれ位の記憶しか

残っていないが、ウリはもちろん破格の廉価。それは新しい時代の到来を感じさせるに充分だった。

しかし同じ頃、僕は労働組合の執行部入りといういま一つの役割を負わされることになってしまった。集会での発言が導火線になったのか、いわゆる祭り上げられたという形。自分では予想もしない成り行きだったが、ほぼ一千名の組合員に早く馴染むためには悪くないかも。そんな気もして引き受けた。

まずは教宣部長という役割だ。賃上げ交渉や三六協定（主^{さくろく}に労働時間などを決める）など、たまには夜を徹しての交渉でも、会社経営の実体が丸見えになってくるのが興味津々で、疲れなどほとんど感ずることがなかった。

会社側は副社長をトップに専務、常務、監査役以下人事、労務課長など七、八人。組合側も委員長や副委員長、書記長以下ほぼ、同

数だが、いまの時代では想像できないぐらい議論が白熱したのには、やはりあの時代ならではの背景があった。

七十一年前、六月のあの上空襲で七階建ての社屋は、外壁だけはなんとか焼け残ったが店内はほぼ全館が丸焼け。全国百貨店の中でも被害状況は最悪、という中からやっと立ち上がりかけた時代だった。国鉄や公共団体のように要求貫徹のためにはすぐストライキ、などとやっていたら双方自滅以外にない。その認識だけは共有しての交渉。それだけに左よりの国鉄や官公労組などから見れば、軟弱な労使協調主義に見えたかもしれないが、お互いに腹の底まで見せ合ってのあの経験は、いま思い起こしても貴重な体験だった。

教宣部長としてはタブロイド版の組合機関紙「あしなみ」を創刊した。新しく選出した編集委員を束ねての不定期刊だが、一面、組

合側を代表する意見欄でもあった「アンテナ」と名づけたコラムは、ほとんど自分で書いたような気がする。

執行部入り二年目には書記長に就任した。

そして三年目には同系列、数社の労組を束ねた連合体の中央書記長。「やりかけた仕事を投げ出すわけにはいかない」という思いだった。

しかしその頃まではまだ販売主任という責任を背負ったままの組合活動だ。

百貨店売場は、絶えずといって良い位何らかの催事を実施する。その度に売場の配置替え、つまり、販売ケースを催事の規模に従って移動させる。かなりの肉体労働だ。さらにそれが終わると商品陳列や正札等も整えなくてはならない。

そんな仕事の計画立案から実施までだから、売場主任の仕事もハンパではない。それにプラス組合役員としての仕事だった。加うるに

半期毎に本決算、中間決算などという深夜までかかる年中行事もあれば、大晦日ともなれば初商の準備のために元旦の朝帰りになるのが恒例となっていた。

いま振り返っても、生涯で最もよく働いた時代だったと思っている。それでいて、残業が終わった後など仲間うちでよく飲みにも出かけていた。給料の上昇率もやがて「うなぎ昇り」という状況に近づいていたのだ。

組合役員も、三年経つても辞めるわけにはいかなかった。

系列事業所も夫々に単独の労組を結成しているのだが、百貨店だけでも鹿児島市の本店の他に宮崎、川内があつたのに、さらに日南、人吉の店舗が出現し、それぞれに単組を結成して連合体に組み入れなければならない。

四年目には中央執行委員長に就任。同時に販売部門から離脱、組合事務所で専従として

その任に当たることになった。

もちろん連合体は百貨店ばかりではない。大手電気会社代理店、冷熱機器の施設会社や卸部門の商事会社、さらには食堂会社など、小さな単組まで入れれば九単組、組合員数は二千人をゆうに越える組織になっていた。

僕が労組活動からの引退を決めたのは、入社後七年経った頃だ。どこから耳に入ったのか、副社長室に呼び出された。

「委員長を辞めるそうやな」

関西出身の副社長は関西弁で押し通していた。「そうだ」と答える僕に

「それで、後任は誰がやるんや？」と聞く。

「いや、それは組合側の問題。事前に会社に報告の義務はないでしょう」

という僕の言葉に、副社長は笑いながら言葉を重ねた。

「固いこと云うな。企業の未来を憂える一同僚として俺は聞いているんや」

僕も笑いながら答えた。何も隠すほどのことでもないからと、名前をつけた後に、

「オトナの話し合いのできる男ですから、心配は要りませんよ」と。

が、そのあと、

「永いことご苦労やったな」と、組合運動の労をねぎらってくれたのには少々驚いた。振り返れば交渉の途中では、失言した会社側の揚げ足を取るようなことを言ったり、自分でも後になって言い過ぎたと思うような、過激な発言など数えきれないほどあったことを思い出すからだ。

だが、そのあと続けてくれた副社長の言葉にはさらにびっくりした。

「一生に一度だろうが、委員長辞任後の勤務地について希望があったら言ってくれ」

僕もこれには素直に申告した。

「いま一度、鹿児島を離れて、中央から鹿児島を眺めてその未来を考えてみたい」と。

東京事務所長として上京したのは、その半年後だった。

※ 仕事も遊びも楽しんだ結果は？

東京事務所勤務は六四年のオリンピックの年を挟んでの三年間。端的に言って、良く働きたる遊んだ時代だった。

仕事はもちろん三十歳台に入ったばかりの働きざかりで当然だが、遊びの方は高校、大学時代の友人が多かったのと、場所（事務所）が六本木に近い西麻布（当時は麻布霞町）だったことも幸いした（災い？）かもしれない。

しかしこの遊びについては本誌十一号にも書かせて貰ったから省略するが、仕事の方は、いまや百貨店も高度成長期、売場拡張のため



通産省への申請が各社から相次いだ時代である。当然わが社などまっ先にその必要があった。幾度も、増築の申請をしては、その都度説明のために通産省に足を運ばなければならなかった。

同時に先進の百貨店では合理化を急いだ時代でもあった。わが社でも、まずは西武百貨店を中心とするJMA（通称ジマ）なる共同仕入機構に加入、次いで伊勢丹を中核とする十一店会という共同仕入組織に加わったりもした。

いや、そればかりではない、伊勢丹（新宿店）では二週間も僕自身、一階の売り場に立つて販売の実務に参加、百貨店の裏側まで勉強させて貰ったと言ってもいい位だった。

東京に取引先は無数にあるが、仕入業務は本社から出張して来る担当責任者や、東京所員がやるから、僕自身がやることは殆どない。

見るのは様々な展示会やファッションショーなど情報収集が主。他には百貨店協会を中心とする他百貨店とのおつき合いなどだ。

しかし実はそれら以外にいま一つ、所長として細心の配慮を要する仕事があった。本社から上京してくる役員たちのお守り役。つまり秘書係である。

社長は毎月上京。ほぼ一週間の滞在だ。副社長、会長などが凡そ二ヶ月に一回、その他、常務や営業部長などが随時、という頻度だが、出張中ともなれば会社内での上下関係とは違った空気が生まれるとでもいうか、急速に親近感が深まって行くようで、僕にとってはむしろ楽しい仕事だった。

とりわけ社長は出張の回数も多いが、滞在日数も長い。その上、就寝時間以外は全て、といってもいいぐらいに側にいる必要がある上司だった。それでいて、お高く止まった所

など全くない鹿児島弁が、温厚な人柄を滲ませていた。

帝都ハイヤーで羽田まで迎えに行くと、帰りの社中で後部席から助手席の僕に

「さて桐野君、今日のヒルメシは何を食おうかね？」と、まず声がかかる。「天ぷらなら銀座の天一でしようがトンカツなら日本橋の・・・」などと、僕も期待をこめて返す。

定宿は帝国ホテル（もちろん当時は旧）だが、研究のためと称してオークラほか、赤坂界隈のホテルに投宿されることもあった。

社長の交友関係は素晴らしい人が多かった。財界人や取引先の社長などもだが、吉井、海老原といった画家など、いわゆる文化人などとの交流も広がった。もちろん僕も、そんな方たちとの会食に陪席させて貰う。

顔が広がる。世間が見えてくる。百貨店を中心とした日本の物流のあらましが分かって

くる。等々、東京勤務はたしかにおいしい仕事だった。百貨店という業態を中心としての事だが、日本物流の長所や欠点も良く分かり、今後益々増大するであろうスーパーもだが、その後を追いかけてくるコンビニなる店舗のチェーン展開なども要警戒であるなど、次代の流れはひしひしと感じていた。

世代の交代時期でもあったのだろう。築地の東本願寺で挙行された三越社長の葬儀にも参列したが、やっぱり忘れ難いのは西武の堤康次郎氏の葬儀だった。

場所からして自前の鉄道路線上にある、これまた自前の豊島公園。その中の体育館内にずらりと並んだ焼香台の台数は、はるか遠くまで霞んでいて、数えきれないほどだった。「これで集まる香典料は一体いくら位になるんだろう？」

「それもだけどき、今日の弔問客はほとんど

全部西武線利用だぜ、電車賃だけでもヘタな百貨店の一日の売り上げ位は上がるんじゃない？」などと、参列した百貨店関係者たちも、葬儀の壮大さに驚きの表情でささやき合っていた。

と、ここで、百貨店と直接の関係はないが、豪勢な堤康次郎の葬儀から時を経ずして行われた、あまりにも対照的ないまひとつの葬儀を紹介しよう。

小泉信三先生、今上天皇のご養育係もされた方と言えば皆さんご承知のはず。小泉先生とわが社の社長、副社長はご昵懇の仲。二人にとっては出身大学の学長でもあられたわけだが、とりわけ副社長は学生時代テニス部で活躍したが、その時代のテニス部長でもあったのが小泉先生。お忍びで先生が来鹿された折も必ずわが社の副社長がお供するという程の間柄だった。

その小泉先生の葬儀が行われたのが、青山斎場。参列者はあの広い斎場の入口で係員に差し出される一枝の玉串を黙って受け取るだけ。香典や記帳ほか受けつけは一切なし。つまり誰が訪れたかも分からないわけだ。

だが、掃き清められた広い斎場に延々と一筋の列を作り、神殿の前で玉串を捧げては、また肅々と長蛇の列をつくりながら去って行く。あの光景は美しい感動的な絵として今でも僕の網膜に焼きついたままだ。

さて、先を急ぐが、鹿児島の本店一階の販売課長として東京から帰任したのが六六年。景気はまだ上り坂の時代である。

着任して二、三日たった頃だった。売場を通りかかった財務担当の常務（後々の社長）に声をかけられた。鹿児島弁丸出しで誰からも親しまれている上司である。東京での労を

ねぎらってくれたのはいいが、その後に、

「どうせ君のこつじやが、仮払いはどうしなつたか？」と聞かれたのには驚いた。仮払いとは会社に対する未払いの金、つまり会社からの借金残高はいくらになったか——というわけだ。

「正確には覚えていませんが——」と僕が答えたのは、凡そ三年間に貰った給料総額に匹敵する額である。

が、常務が笑いながら口にしてくれた言葉にはまたしてもびっくりした。

「え、そこで済んだか。君にしちや上出来じやつたが！」

僕は、笑いながら売場から去って行く常務の後姿に、思わず最敬礼していた。

世はまさにゴルフがはやりはじめた時代でもあったのだ。全国百貨店の、東京事務所長の連絡会などでもゴルフを兼ねての会が多

かった。

事務所のある西麻布から至近距離にある砧ゴルフ場まで、タクシーで行っても片道五百円、プレー費も一ラウンド千円で回れた時代だ。

コース脇の練習ではプロ志望の樋口久子に、中村寅吉が指導する姿が見られた頃の話である。

※ 上出来の収支とんとん



本店一階の販売課長は六九年春まで、わが社だけでなく、日本中の百貨店成長がピークにさしかかろうという時期だっただけに、またしてもわずか三年での転勤に驚いた。

系列会社の中に、大手電機メーカーの系列販売会社代理店があるのだが、ちよつと前までは系列会社の中でも最高のボーナスを羨ましがられていたのに、東京オリンピック後

ブームが去ってピンチ到来。不良在庫の山を抱えて、たいへんだから急遽立て直せというのである。

電機といっても通常われわれが目にするのは、いわゆる百貨店店頭に並んでいる家電(家庭電気製品)だが、当社では家電部の他に機器部や施設部があつて、モーターやポンプなど機械屋さんや工事屋さん相手の商売もやれば、エレベーターやエスカレーターなど、設計事務所や建設屋さん相手の営業も行うのだ。もちろんそのアフターケアのためには技術にすぐれたサービス部門も充実させなければならぬ。それを、百人ちよつとの人員で賄わなければならないのだ。

商品知識等については全くと云つていいほどの門外漢。古参社員には、労組活動時代の縁で多少の触れ合いがあつたとはいえ、ほとんど初見参。それに年長の役職者、監査役や

調査部長などがおられる中に取締役営業本部長としての赴任である。

しかし僕は喜んで引き受けた。実は本社財務担当常務から内命を受けていたからだ。

「荒療治でいいから思い切りやってくれ。単年度の損金はいくら出しても本社が引き受ける。従業員の首も、役職や年令に拘わらず何人切っても構わない。これも本社で引き取るというのだ。この条件なら誰だってOKだろう。それに、勤務場所が百貨店という箱の中から飛び出して、自由に青空の下を駆け廻れる、そんな開放感もあった。

販売会社の本社はもちろん鹿児島市（いづろから後に谷山二号用地に移転）だが、奄美大島をはじめ川内、鹿屋、栗野、加世田に営業所を置き、規模に応じた社員に車輛、そしてそれに応じた在庫を抱えているのだ。さらに大きな取引先の倉庫に眠っている在庫もあ

る。しかも当時県下の取引先は口座数だけ数えても五百社以上。

そうだ、いま電気屋さんといえば、超大型の今風の店舗しか想像できない方が大部分だろうが、どんな小さな町にも、夫々のメーカーの看板を揚げた電気屋さんが一軒や二軒は必ず存在した。そんな時代が、ついバブル崩壊までわが国にはあったのである。

不良在庫一掃は難しい仕事ではない。本社倉庫ばかりか各営業所はもちろん、必要な場合は取引先の倉庫まで所長たちと見て廻る。

例えば正価十万円の旧型品もしくは傷物（少々難あり）品を「これはいくらでなら売れるか？」と問えば「八万円なら売れるのは」と答える。そこで間髪を入れず「はい、では五万円。今週中に売れ！」と即決する。

ほぼ二年足らずで全県下の在庫の内容は一新した。もちろん算出された損害金額の大き

さにオロオロする監査役など尻目に――である。

百貨店本店から「百貨店に復帰の希望があればポストを用意する」と伝えられたのが四年目。

だが、「まだやりかけの仕事が多すぎる」を理由に即、断りを入れた。

やりかけの仕事は嘘ではない。人員整理も終わりスリム化は実現していたが、教育訓練や賃金体系など改革しかけた仕事は多かった。しかしそれもだが、日本有数の電機メーカー相手とのケンカ（といっても良い位、言い合っていた）など、つまり仕事自体が面白くなっていたし、新しく需要の増加してきた配電盤工場（後に常務に就任）の設立準備などに追われていた。

もちろんその間に、僕が仕えた百貨店社長も、次いで社長に就任された旧副社長もすで

に他界されていたことが、僕の百貨店への興味を半減させた一因だったと思う。

僕がサラリーマンを辞したのは、それからさらに四年後、四十五歳になっていた。

「俺の人生、これでいいのか？」

ふと、そんなことを考え始めたのが一年前からだった。

百貨店で十三年間、関連の代理店勤務八年、計二十一年間。しかも現状は二つの役員ポストを兼ねて、これまでの中では最も恵まれた状況。そつなく日常業務を続ければ少なくとも定年までは――。

そんな計算もしなかったといえはウソになるが、やはり「ここは俺の居場所ではない」というのが、一年考え続けた末の結論だった。

僕の辞職騒ぎが一段落した頃である。

机周辺の後片付けをしていた僕に、経理課

長が申しわけなさそうな顔で近づいてきた。

「ほんとに申し上げにくいのですが・・・」
と口ごもる前に、僕の方から切り出した。

「退職金だろう。赤になった？」

「いや、赤にはなりませんがんばりましょう」
「なります」と答える。

「そりゃ良かった。ほっとしたよ」

そういう僕の笑い声に、彼もほっとした様子でぺこりと頭を下げた。

彼とは二人だけの約束があったのだ。接待交際費の使い方だが、代理店業界でも高成長時期とも重なって飲食の機会が多かった。何せ取引先が多い、殊にやゝ大手の電材店、工事屋さんなど情報交換の意味も含めて会合が多い。会社宛に届く請求書も僕関係だけでも月に十枚は下らなかった。もちろん中には社内下部達との飲食もある。中には公とも取れるが私といわれても仕方ないものもある。

当初はその区分をいちいち明確にしていたが、途中から僕の提案に従って貰った。つまり、僕関連の請求に対しては会社に一括して全部払って貰うが、その半分は後に僕の給料から差し引くと。

「それじゃ本部長が大変ですよ」と心配する経理課長を押し切ったのは僕である。もちろん、東京事務所時代の借金まで含めてのことだが、サラリーマン時代を通しての収支とんとは僕にしては出来だろう。

人生を楽しむために必要なのは「サム・マナー」。サム・マナーとは人夫々に必要な額のこと。それだけは僕も稼いだのだ。マスゾエさんみたいにセコイことはしないで。

※ いとしき日々



高橋真梨子の歌に出てくる「マリー」の居所は五番街だが、僕がオープンさせた。パブ「マ

リー」は高見馬場。商工会議所ビル横の、六階建てビル（二幸ビル）の三階だった。

サラリーマン引退一年後、資本金一千万円の小さな会社マリー産業（株）を創設、飲食業一号店のつもり。社名も店名も女性名にしたのは百貨店業界トップ伊勢丹の、戦略第一「まずは女性を引きつけることを考えろ、男は二の次、三の次でいい」が、頭の隅にあったから。出資には身内以外にかつての僚友や同級生など三十人以上が参加して貰ったのにぎやかなスタート。もちろんその他の創業費用は計画書を銀行に提出してすべて借入れである。

当時のパブとしては赤レンガ造りの室内に、グランドピアノを取り巻く大理石のテーブルを置いたりした、ちよつと小洒落た雰囲気が目新しかったりして滑り出しは上々だった。

百貨店の社長（四代目）ばかりか東京・大阪

の取引先社長たちまで案内して来てくれたり、高見馬場に、ちよつとしたブームが沸いたといつてもいいぐらいのにぎわいだった。

ピアノにこだわったのは往年のアメリカ映画「カサブランカ」の、ハムフリーボガード扮するリックの店が、計画時から頭のどこかにあった。黒人ピアニストのサムが「時の過ぎゆくままに」を弾くあの場面である。

以来、僕のマリー産業経営は、十六年間（途中で営業形態をダンスもできるように風俗営業許可を得るため、後半は屋号をパブ「ワシントン」に変更）。二十世紀も終わりに近づいた九四年まで、昭和も変わった平成六年に閉鎖、解散した。

日本経済のバブルが崩壊、ビルの持主が変わり建て直しが決まったのを機に、還暦を過ぎた年齢も考えての結論だった。

で、商売としての（つまり経済学部卒とし

の) 最終的な成否は? と問われそうだが、これはもちろん「大成功」などと即答はできない。

いや、それどころか、途中でピンチに見舞われてこずったこともあったが、これ又例によって例の如く終わりは収支とんとん。株主の皆さんにも、ご迷惑をかけることなく幕を閉じることができて幸いだった。しかも最後には名残を惜しむ常連客の皆さんに、「お別れの会」まで開いて頂いて―である。

しかし、後になって気づいたことだが、マリー時代はたしかに十六年間だけだが、僕にとっては、その後の人生のほとんど全てが、あの時代に決定づけられたようなものでもあった。

「随筆かごしま」の上籬義之さんがあの店にやってきたのは、鹿児島で本を出版するなら「桐野という男に書かせてみなさい」とMB

C役員の東真人さんが言ってくださったからだっただけ。一昨年「昭和は遙か雲のうへ」という本を南日本新聞社から出版された東さんである。天文館は文化通り東端の「金平」(今は立派な料亭になっているが大昔の)でよくお会いしていた先輩である。

ところで義之さんにおだてられて書きはじめた連載「商人往来」を、これまた「面白い、面白い」とおだてて下さったのが、当時女子短大の教授だった児童文学者のたかし・よいち先生である。

タウン情報誌「ぴつく・あつぷ」を主宰されていた保ゆかりさんもお得意さまの一人だった。誘われて書きはじめたのが「男のつぶやき」だったが、続けて「外野席」と題して最終回まで百三十回以上続いたのでは?

そんな流れは地元新聞社にまで伝わり、「はーふたいむ」と題したエッセーと絵を、百回

も書かせてもらい、やがて正月元旦号の小説まで――。

もちろん、わが愛する「セイ談会」とのご縁も、サラリーマンからパブ経営への転身がなければ、あり得なかったわけだ。

そのせいだろう。あの店、マリーを振り返るたびに、抱きしめたくなるほどの　いとし日々が甦ってくるのは、ぬるま湯の、サラリーマンからの脱出は正解だった。

ところで、バブルの崩壊はまた、別の意味でもひとつの時代の終焉だった。

フィリピン戦線で死線を乗り越えて神戸に帰ってきた中内功氏が、スーパー・ダイエーを引っさげて日本小売業界を席巻。遂に年商一兆円を超えるという日本一の金字塔を立てたのには誰しもが驚いた。

だが栄光は一瞬、バブル崩壊と共にやがてその座から滑り落ちていったのだ。というそ

の時代の軌跡が僕らの時代と重なるのだ。

あの戦争での犠牲者はおよそ三百万人。その中核をなした戦中派の生き残りが中内功氏だとすれば、間一髪で生き延びることができた僕らは、戦中派のしんがりと言ってもいいだろう。例えは悪いが、ポツカリと大きな穴が空いたような戦後の働き手不足のお陰で、僕らが伸び伸びと仕事をやらせて貰った、そんな世代でもあったというわけだ。存分に働いた、もちろんそれもあるが、存分に楽しませてもらった、という実感の方がはるかに大きい。

でも、いつだったか。

「これで僕らも借金ゼロ、遺すべき資産もゼロ、理想の形で人生を終われそうだな」とうっかり口を滑らせたとき、ぴしやりと家人の口から出てきた言葉には驚いた。

「そんな話、私の前では良いけど、他人さま

の前では言わないでね。恥ずかしいから」なるほど、と、僕もあえて反対しないことにした。「どうやら俺の欠点は世間の常識を知らないことらしい。でも、彼女の欠点は、この世には間違った常識も多いことを知らないことでは？」と、首をひねりながら―である。

近ごろカラオケに出かけることが多い。もちろん家内同伴。彼女もかなり上手になった。よく選ぶ曲に「時代おくれの酒場」がある。あれは「マリー」時代の苦勞を思い出しながら―歌っているのだろう。そう思いながら僕は聞いている

という僕が近頃おぼえたのは「旅の終わりに」というド演歌だ。

旅の終わりに見つけた夢は

北の港の小さな酒場

そこら辺の歌詞に心引かれて―である。思

い出すのはもちろん六十年以上も昔の「リラ」だ。北の港にもリラの花は咲くのだろうか？
そういえば、

これもどこでだったか、誰の言葉だったかも忘れたが、わりと最近、目に入るなりストンと納得した言葉があった。

死こそ常態

生はいとしき蜃気楼

「リラ」はもう夢と消えて久しいが、「マリー」も今は痕跡もなく消えて、何の変哲もない、近ごろばやりのホテルが建っているだけだ。

「あのマリーも蜃気楼だったのでは？」

最近では歌っていて、ふとそんな気がしてくることさえある。

しかし蜃気楼なればこそ、いとしきはいや増していくようでもあるのだ。

(エッセイスト)

入来町麓と八重から

世界大乱の時代を考える

中西 喜彦



一、不思議なご縁を得て

最近武家屋敷群として整備されてきた入来町浦之名には中世清色城の在った麓地区と山側の八重地区がある。八重山は南側が鹿児島市に合併した郡山町の一部でもあり、西側は薩摩川内市に面し、甲突川や川内川の水源地の一つになっている。筆者はこの八重山の入来町側の丘陵地に位置する約150ヘクタールの大学牧場建設と運営に約38年間関与した。一方、麓地区には7年前の平成22年3月に、入来花木会故入院貞子氏主催の8月開催された第7回入来薪能の取材で茅草

門邸を訪問した。以来、庵主入院重朝氏に色々とご指導を頂いている。

入来牧場の概要は本冊子9号（平成25年発行）で詳しく説明しているので要点だけ述べると、この牧場建設や運営に主体的に関与したことで、牧畜民族が主体をなす、欧米や中国の人達の考え方がある程度理解できるようになったと考えている。翻^{ひるがえ}つて我が国について考えると稲作民族としての考え方が強く、欧米人や中国人との考え方の違いを感じている。

一方、入来薪能のご縁で、入院院家に入入りし、入来文書や渋谷一族の薩摩下向の歴史などを知ることが出来た。筆者は能に興味を持ち、冊子6号でも書いたように人生の指針みたいな感じを持っている。室町から江戸時代に武家の式楽として活用されて来た。歴史の一人語りのような面があり、殆ど内容に変

更がなくそのまま現代まで守り伝えられている。11号で故入院貞子氏が7回にも亘つて入来薪能を開催された意味を^{さんたく}付度してみた。繰り返しになるが能「鳥追舟」は薩摩川内市鳥追集落での物語を題材にしたものを代表に、中世の社会を紹介する題材の演能を7回も薪能として試みられている。

庵主重朝氏の見解では日本の歴史は鎌倉時代からが現代日本のあり方に繋がっている。それまでは支那と類似の国家形態だったのではないかとのことである。筆者もそれに賛同するものである。故貞子氏には入来院家と相良家が日本で一番一箇所への定住期間が長いとお聞きしたことがある。そういう意味では朝河博士の「入来文書」や「貞子の語る入来文書」をはじめとして、茅茸門庵主の歴史に関する見解は傾聴するべきものと考えている。教示頂いた本に「落合莞爾…金融ワンワ―

ルド、成甲書房、平成25年」がある。地球経済を統べるものたちはいるという内容である。本著は「歴史に向き合う重要性」を強調されているが、血筋が語る趣があり、後醍醐天皇の息子護良親王を遠祖とした方である。



故入院貞子さんが入来麓に移り住んで来られた頃商品化された「茅門まんじゅう」。その後途絶えていましたが、清色地区の事業として製造が復活しました。平成28年5月「武家茶房 Monjo」で撮影。

渋谷兄弟が関東から薩摩に下向したのが1248年であり、ほぼ入来院家の遠祖定心が活躍された時期と機を一つにしている。公家と武家の子孫の歴史に対する所感は他の追従を許さぬことを実感しているところである。

二、今後の世界の動向は

ところで、第二次世界大戦後70年を過ぎると流石に米国も戦争疲れで悩んでいるように見える。各地で銃乱射事件が起き、国際派で米国は世界の警察官だと言っている人達は、トランプ旋風に慌てている。欧州は移民・難民問題、さらに経済問題で難儀をしている。七つの海に君臨した大英帝国は、ユーロ圏離脱問題でユーロ圏のみならず自国も分裂の兆しが強い。

近隣の中国も我が国には爆買などで歓迎される面もあるが、実態は既に経済破綻に陥入っているとも言われている。露はエネルギー

―供給問題で欧米と対立している。

今後世界はどうなっていくのであろうか。歴史は繰り返すと言うが現状は第一次大戦前後に似ていると言う人もいる。筆者は地勢や民族の本質が変わらないとすれば当然同じような動向を繰り返すのではないかと思うのである。特に、人は80年ぐらいの周期で入れ替わるので、また、最初から人生が始まると言える。その際頼りになるのは歴史観である。突き詰めると地勢に合わせて、如何に食べ、如何に子孫を残すかということになる。

落合莞爾氏は天孫騎馬民族、海洋民族、倭族の合作競争により日本の歴史を形成して来たと述べている。最近の考古学はDNA分析や発掘技術の発達により、10万年前からの民族の消長を世界全体で明らかにできるようになった。それらをみて言えることは欧米や中国などの国では牧畜民族が主導権を行使して

来たように思われる。世界史の始まりと言われる元朝の世界統一は一ひとえに馬と弓の力によると言われている。

現在の世相をみると生活形態から来る考えに対して誤解が多いように思われる。特に今後の世界動乱の中で日本の方向を定めて行くには、牧畜と農耕と言う基本的な食料生産の営みで身につけた性^{さが}を互いに熟知することが必要である。そこで、牧畜の特徴を明らかにし、日本の性（習性）との違いを考えてみたい。

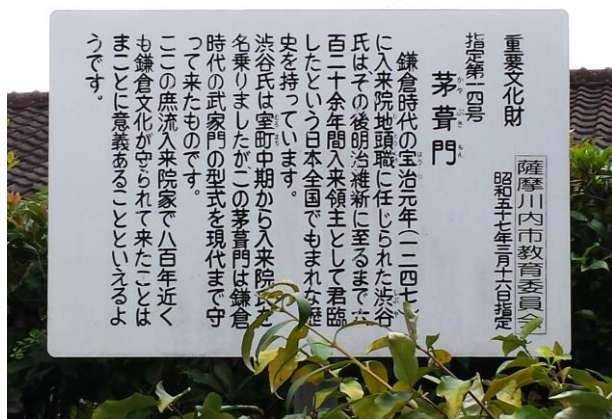
三、我が国の立ち位置

米国で歴史教科書として採用されている『マクニール氏の世界史』では中世ヨーロッパと日本を次のように紹介している。「日本は中国と、西ヨーロッパはビザンティウムと、という風に、どちらも、既存の、高度に発達した隣接の複合文明社会との関係が密接だっ

た。また、日本もヨーロッパも、きわ立って軍事中心の傾向を示し、またそれが、文明社会の民族の間ではどこにもみられないようなあり方で、社会の全階層にゆきわたっていた。このため、近隣の文明開花の社会に対しても一種の毅然たる態度が生まれ、したがって、ヨーロッパ人も日本人も、そのような隣人たちから、よいと思ったものをなんでも取り入れて、しかも自分たちの誇りの気持ちや文化的個性をなくさないでいられた。その結果、類例のないほど柔軟な進歩成長の能力を彼らは持つようになって千五百年ごろまでに中世ヨーロッパも日本も、多くの点で世界のどの文明と比べても引けをとらぬ文化水準や文明のスタイルに到達した（増田義郎・佐々木昭夫訳、中公文庫）。

ここで、前号でも触れたが「貞子の語る入来文書」の出番である。入来院家は鎌倉時代

の渋谷一族下向以来明治維新までは現在の場所に居住した我が国でも稀有な存在である。朝河貫一氏の日欧の封建制度の比較研究は日本の例として、入来院家に保存されてきた記録を主に研究されている。骨子は日本の上級



800年近くの歴史を有する茅葺門の由来を記した案内板。茅葺門をくぐったすぐ右手にあります。

武士と下級武士・農民の関係は忠誠心と比較的平等な経済性に依存するのに対して、ヨーロッパでは王家と騎士集団との契約によるものである。能楽の題材になった「鳥追舟」は川内川流域の日暮集落の主人が土地訴訟で京都に上り、仲々帰省出来ない内に、家来に家乗っ取られて母子が鳥追舟に乗せられて田圃の鳥を追いつまわっていると主人が帰省して、家来を咎める話である。また、筆者の本籍である福岡の芦屋の能「砦」^{きぬた}は土地訴訟のため都に上った主人が帰省しなかったため、妻が恋い焦がれて死んでしまう話である。

また、家来の主人に対する忠誠心を示した曲として「鉢ノ木」がある。元寇で活躍した北条時宗が僧形に身をやつし、全国の民情を視察した時のことである。冬の雪空で通りかかった家で宿を乞うも断られる。さらなる懇願に対応した主人が何もないが昔世に出てい

た頃に丹精して育てた、梅、桜、松の植木鉢を薪にして接待する。その時、自分は今落ちぶれているが一旦幕府に交事あれば馬に跨り錆び刀を持って陣に駆けつけるという。

時宗が帰国後全国に召集令をかけることや、せ馬に乗って駆けつけたという。時宗大変喜び薪になった鉢ノ木の代わりに梅桜松と名のついた土地を与えたという。我が国では室町時代にほぼ日本文化の基礎が出来たと言われている。北条時宗の時に元寇に勝利したものの、戦に疲弊し次の戦国時代に進んで行く。丁度信長、秀吉の時代に西欧の東南アジア進出と重なり、ポルトガル、スペインの訪日布教は、土地の支配問題もからみ遂にはキリスト教の国外追放と鎖国へと進んで行く。

このように見てくると秀吉の時に石高として米の生産量で各土地の評価が決まり、土農工商と言われるように稲作による土地生産

に基盤が置かれてきた。このような推移で現代の日本の形が作られたと考えられる。

四、牧畜と農耕の特徴

牧畜では山羊、羊、肉用牛、乳用牛を飼育して、肉、乳、羊毛および皮などを生産する。

一般論的として牧畜と農耕の違いは1年間に亘って生産資源としての動物を飼育しなければならぬのに、作物生産は播種、生育、収穫とかなり間々で手抜きが出来る。さらに種子と言う形態で再生産の資源を保存できる。

しかし、牧畜では種畜と雌畜を常に飼育していなければならない。日本でみられる四季のほかに、乾季と雨季の国がある。いずれも6月から9月までの牧草の最盛期しか良質の餌となる牧草は得られない。そこで、夏期を中心に牧草を刈り取り、干し草やサイレージ(一種の漬物)に加工して蓄える必要がある。これらの作業は常に家畜を飼育しながらの作業

なので、田植えや稲刈り以上にハードな仕事になる。

欧米の畜産業を見て廻つての第一印象は我が国との規模の違いである。30年程前、コロラドで75万頭の集団飼育施設を見学した。1施設で鹿児島県の肉用牛飼育頭数の約3倍の頭数である。一般にフィードロットと云われている施設で屋根はなく、五百頭単位で仕切られていて、給餌施設は自動化されており、馬にのつたカーボーイが数人で管理しており巡回して患畜や死亡したものを監視していた。

当時案内してくれた栄養学の教授はロッキーマウンテン麓で放牧された子牛を集めて購入するが、その糞の形状からどの群の子牛の生育が今後良いかを判断することであつた。日本のように1頭ずつ検査するのとは異なっている。また、現場につくまでの道すがら一

面のトウモロコシ畑が続き、収穫されたトウモロコシはサイロにも入れずに一面に野積されていた。雨量は年間500ミリぐらいで鹿児島島の四分の一程度である。

フランスで国際家畜繁殖学会がニースであつた時に参加した。フランスの畜産を紹介するツアーで2泊3日のバス旅行でパリからニースまでの経路で行われた。感心したのは土地の形状に合わせて飼育する家畜が異なっている。丘陵地では山羊を飼い、山羊乳を搾^{しぼ}って長期貯蔵が効き運搬に便利なブルーチーズを生産している。冬の時期であつたが干し草が沢山貯蔵されていた。また、牧野の地力や収量などにより肉用牛と乳用牛の飼育が地域ごとに行われていた。

これに対して我が国の畜産は欧米では自給が可能な家畜飼料穀類を輸入している。所謂加工型畜産である。しかし、周年の作業工

程は同様である。

七、おわりに

世界大乱の現状をみると、金融を中心としたグローバリズムと産業を中心としたナショナルリズムが^{せめ}闘ぎあっているように見える。その根底に農耕民族と牧畜民族の生活の知恵の違いがある。また、これに地勢と民族などの特色が加わる。日本人は単一民族みたいに考えられがちであるが、落合莞爾氏の説を借用すると、メソポタミヤ地方を源とする人達がインド、中国、朝鮮などを経由して、日本列島に縄文、弥生、古墳時代を通じて、住み着き現在日本の基礎作りに関与しているという。

古田武彦氏の説では663年の白村江の敗戦で、我が国は唐に39年間占領されていたという。日本国を名乗るようになったのが大宝律令701年。しかし、科挙以外は殆ど唐の制度が取り入れられている。やはり現代

のもととは封建制度を取る武士社会からになる。このようにしてみると四千年の歴史を持つと言われる中国も岡田英弘氏の「古代のままの窃盗団王朝」であり、移民の国米国はわずかに江戸時代ぐらいしか熟度のない国と言える。現代日本の土台は鎌倉時代に権力を握った幕府から領地を分配され、それを維持するために、武芸を磨き武具を揃え「一所懸命」に領地の開発に励むようになる。また、宮廷文化も取りいれ、独特の武家文化を樹立してきた。これは前述の歴史教科書のとおりである。

その証として、当時世界最強の元軍団の襲撃を二度も退けている。そのような視点から入来をみると色々な点で興味が尽きない。元寇の際博多防衛で奮闘した入来院三兄弟を祀る若宮明神社を始めとして歴代、廣瀬神社、重来神社などがある。先日も茅葺門近くの赤

城神社跡を散策していると1600年代奉納の石灯籠があった。繰り返しになるが入来薪能では鎌倉時代の入り口のところを再現するため、屋島、清経、忠度および巴と源平合戦や木曾義仲の戦いを上演している。土地訴訟では「鳥追舟」が紹介されている。

渋谷5兄弟薩摩下向の中で、入来院だけが明治まで存続しているのは偶然だけではないと考える。初代の定心（入来院五郎房）は仏門に帰依しており、かなり丁寧な住民対応があったのではないかと想像される。さらに、何処の家も同様なことであるが、領地の攻防だけでなく、婚姻対策が上手く行き、薩摩の覇者島津家とも何とか共存できたと考えられる。

この中に、国家、領地、家などに対する忠誠心が育まれ、公私の別も自然に醸成されたものと考えられる。また、能の曲目には鉢ノ

木のように幕府への忠誠心を示したものがある。最近前東京都知事舛添要一氏の公金私的流用問題が起こったが本人は法律に違反しておらず疚しいところはないという。これに対して99%の都民が「せこい」と怒ったのに感心した。ひよっとすると、中国や韓国の人にはこの公私の感覚は分からないのではないかとさえ思ったのである。

○牧畜の特徴

一方、八重での牧場経営や欧米での実地見学は、彼^{ひが}我の利点と弱点を知ることが出来る。稲作では美田を維持して、田植えや稲刈り時期に人力を集中する産業である。ところが牧畜では1年間に亘って肉牛にせよ乳牛にせよ毎日餌を食べさせねばならない。欧米では牧野の面積を広く取り牧柵で囲って管理する。ところが実際やってみると、10キロの牧柵を張り巡らしても1メートルの破れがあると



平成 27 年 8 月の台風 15 号で倒壊した茅葺門。平成 28 年 4 月、本誌表紙の写真に見るように新しく再現されました。

隣接地の牧野に全頭逃げ出して困った。1 年中の飼料の確保、分娩管理、子牛育成、搾乳など 1 年中絶え間なく働くため、年間を通じて必要かつ最低限の労力で接する必要がある。1 年間に亘って牛を飼育する技術は稲作と全

く異なったものである。各時代の戦争において、牧畜系の民族に農耕系の民族が負け続けたのもこの生活形態に原因があると思われる。第二次大戦に於ける日本軍の敗戦も戦線拡大に対して兵站が対応出来なかったことに尽きるのではないかと思われる。

○今後の対応

今後の日本の行く末を考えるには、「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」とある。まず民族であるが、最近の DNA 分析法の進歩により、世界各地で出土した遺骨の遺伝子の種類が日本は非常に多様性があるということである。所謂我が国では各地方で異なる民族が共存して来たことが伺える。地勢でみるとアジアモンスーン地帯で、高温多雨で周囲を海に囲まれている。水田稲作は非常に効率的に食料を確保でき、海や川からの魚介類を加えるとかなりの人口扶養力がある。しかし、

地震、雷、火事、台風などに見舞われ、独特の人生観を創り上げてきた。能でしばしば取り上げられる「草木国土悉皆成仏」という思想である。自然との共生ということもいわれており、今後の重要な指針になると考える。

民族については家の格や経済状態なども考慮して婚姻が盛んに行われてきた。土農工商と言うが武士社会での上述のあり方が他の階層にもおよび家と言う単位で維持されてきた。やはり島国で練り上げられた血縁と3世代ぐらいの単位が良いと思われる。

今後情報入手が益々容易になり、また、職業の選択、移民などが多くなってくると、何を基本に置くかを良く考えなければならぬ。前述のように約800年に亘り一箇所に定住して来た秘密は大変貴重なものである。また、牧畜民族の生活はかなりシンプルライフでかつ個人的判断を要求されることが多い。筆者

はこの両方の体験を入来町浦之名麓と八重で行うことが出来た。また、我が国の来し方を説く能楽によって引き合わせて戴いたことに感謝したい。



談笑中の庵主・入来院重朝さん（右）と炉ばたセイ談会会長の桐野三郎さん（平成27年9月重朝さん宅にて撮影）

編集後記・・・

■本誌に関わるようになって7年、貞子さんとお別れして6年目で、来年は7回忌となる。5月に故貞子さんに勧誘された鹿児島文化サロンの仲間たちと麓地区の歴史探訪を本田さんの案内で行った。文や話だけでない実地も改めて観察できた。馬齢を重ねながらも日本のへそのような場所を知ることが出来て感謝している。今回も桐野会長から約2万字の長文を投稿戴いた。酸素ボンベで吸入しながらの口述出筆と聞く。若き日に懸命に生きられた様子を子孫に伝えたいとの思いと推察する。謡曲「実盛」の「其の執心の修羅の業、巡り巡りてまたここに」の文句を思い出す。脱稿に心より敬意を表したい。(中西)

■桐野会長から原稿を頂き早速編集に着手させて頂くと、あの往年のアメリカ映画「カサブランカ」で黒人ピアニストが「時の過ぎゆくままに」をひく場面のこと書かれている。実は、天文館シネマパラダイスで1950～60年代の傑作娯楽映画を上映する「新・午前十時の映画祭」という企画をやっている。昨年の7月に観たばかりだったので場面が浮かんでくるが、今もつ一度観たいという思いにかられ、町内(さつま町)のツタヤに行ってみた。果た

してDVDが置いてあった。映画「カサブランカ」に浸りながらの編集作業になった。(下土橋) ■鹿児島市の中華料理屋の一軒がもつすべ店を閉じる。徒手空拳で訪日以来、営々と築き上げてきた業績を惜しげも無く捨て、中国に里帰りするらしい。日本に魅力がないのか、故郷は忘れがたいのか、判然とはしないけれども、本人はサバサバしている。我が身を振り返る。縁もゆかりもない国で食べていけるか、成功したとして、はいサイナと、後ろを見ずに立ち去れるか。はやっていた韓国料理屋もささと店をたたんで、こちらは日本で悠々と暮らしている。身辺に関する限り、中韓に完敗の日々が続いている。(澁谷)

「炉ばたセイ談」 第12号

炉ばたセイ談会会長

桐野三郎

編集担当 中西喜彦・下土橋渡・澁谷繁樹

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成28年秋
第12号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局